

501

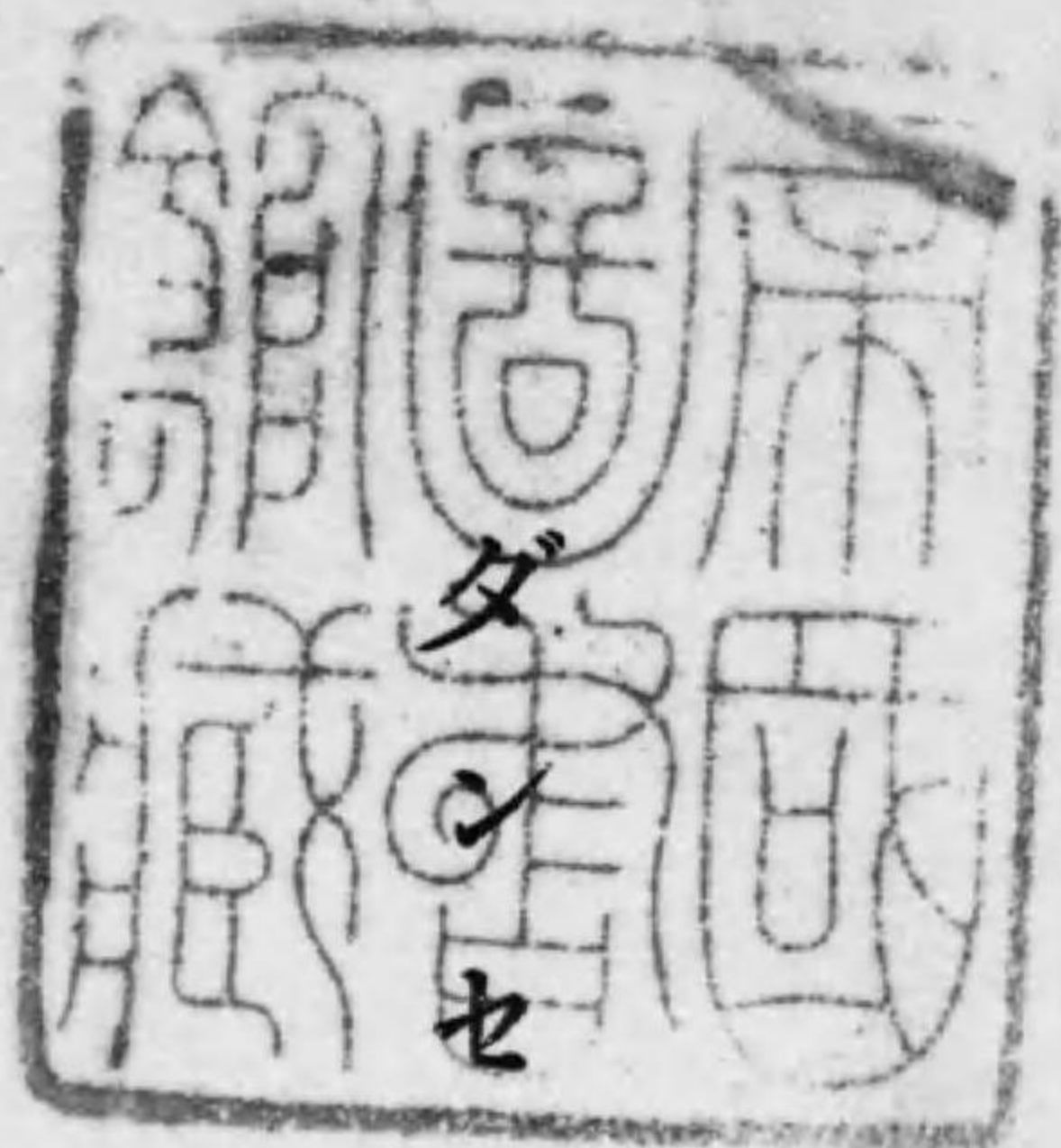
213



始



501-213



ニイ戲曲全集

大正
10 11.15
内交



PREFACE

When Lord Dunsany's plays began to appear on the stage of the Abbey Theatre in Dublin ten years ago, many of those of us who had dreamed and worked for the creation of a national drama in Ireland had hopes that they would save the movement from the decay which had then shown symptoms of setting in.

The strong genius of Synge had created a tradition of harsh plays set perpetually in farm kitchens, from which the new dramatists seemed incapable of breaking away. Their creative impulse moved round a cage seeking ways of escape into expression, but it crawled along the ground of so-called realism and feared the stigma of idealism. In this it was mistaken. There is no side-way of escape when the Winds of God are drawn towards a centre of strong desire. Any cyclone could have told them that: it must either find escape towards heaven or perish. The dramatists in the wake of Synge seemed determined to perish—and succeeded. But before they succeeded in abasing the dreams of the originators of the Irish dramatic movement to the level of the music-hall stage, there was a glimmer of hope when in 1909 "The Glittering Gate" by Lord Dunsany was produced.

The idealistic element in the new dramatist set him beside Yeats; but there was this difference: Yeats gathered the fuel for the fire of his genius in Irish woodlands of romance, and the flame thereof became a beacon: Dunsany took his fire in both his hands and scampered with it across the world, and off the world at a tangent into a realm built out of "such stuff as dreams are made of."

The trouble with Dunsany's dreams, however, was that they lacked a sense of responsibility and substance. They were all

circumference, with no centre that one could sit down on with a feeling of certainty; and Ireland, in the midst of howling winds and whirling leaves, must have a quiet corner for a dream—as Patrick Pearce, the night before he was executed in 1916, found a quiet corner in his cell away from the tumult of life in which to write a poem about children. Consequently Lord Dunsany's plays exerted no influence within the Irish dramatic movement. Indeed they never belonged integrally to it although performed on its official stage. Their poetry, their fancy, their glimpses of vision, their humour both gay and grim, stand alone, not only as regards the Irish drama, but probably in the drama of the world.

But while Dunsany was not in the late Irish dramatic movement, he came out of it; that is to say, he belongs to a propulsive tendency that has at all times balanced the indrawn movements in Ireland. He has felt the same urge across the world and beyond as drove the Irish monks to Europe in the Middle Ages for the purpose (only recently seen) of preserving the spark of culture through the thousand years of night. John the Scot, one such monk in the ninth century in France, argued with Popes and settled up the affairs of the universe; and Dunsany, the creator of a new set of Gods and their realms, would hardly be surprised if invited to lay the foundation-stone of a new solar system.

It was this gift of free creative imagination that brought the Irish dramatic movement into existence. Its reappearance in Lord Dunsany's works brought the hope that it would give the stage-peasant a rest, or set him in his proper place as part, not whole, of the drama, but the hope was doomed to disappointment. The movement died of spiritual starvation and re-breathing its own spent breath. It rests from its labours, but its works do follow it in many books which he who runs may read.

JAMES H. COUSINS.

ダンセニイの「山の神々」を読んだとき、それは自分に取つて、一つの驚異であつた。同じ愛蘭の劇作家たるシングは、劇作に志すものに、人を駭するものを書けと云つた。その意味で、「山の神々」ほど、人を駭する戯曲はあるまいと思ふ。批評家のフランク・ハリスが、倫敦に於ける「山の神々」の上演を見て、「二十年来余はかゝる芝居を見しことなし」と激賞したのも、過言ではあるまいと思ふ。それに付けても、かゝる荒唐無稽の構想を駆使して、而も舞臺の上に神祕的な畏怖を醸し出す、ダンセニイの天才的手腕を認めざるを得ないのである。過日、商科大學の英語部が「山の神々」を試演したときも、學生達の未

熟なる演出と不完全なる扮装、舞臺装置とも拘はらず、七人の青色の神々が七人の乞食達を化石せしむる最後の幕切は、觀者に一種の凄味を感ぜしめずには置かなかつたさうである。

ダンセニイの作品の面白さは、その構想の天馬空を行くが如く奔放自在であることである。「光の門」が開かれれば、たゞ漠々たる虚空の懸れるが如き、柔順猫の如き女王が、突如としてナイルの水を切つて、數人の王を溺らせるが如き、王位を恢復したるアルギメネス王が、尙死狗の骨を喰はんと欲するが如き奔放自在、しかも剃刀の如き皮肉を包める構想は、此の作者の獨壇場であつて、豊富なる詩人的空想の所産であらう。

ダンセニイの劇作家として、秀れたる點は、恐らく劇的瞬間を掴むことの巧みさであらう。神々に化けて、得意になつて居る乞食の前に、本當の神々が足音を轟かせて、登場する光景は、皮肉なしかも、何といふ感動的エキシティングな光景であら

う。食卓に就て居る敵なる王者達を見下しながら、女王が、水を切れと黒奴に命ずる刹那の如き、何と云ふ緊張した劇的な瞬間であらう。

ダンセニイのもう一つの特色は、その清麗な表現である。何等不純な冗辯を交へざる表現である。簡明にして光澤ある文章は、聖書のスタイルを摸したものだと言はれて居る。

近代劇の多くが、問題劇思想劇に墮し、藝術以外、多くの雜音を交へて居るに比し、愛蘭劇作家の二三の人のみは、純粹に藝術的である。ダンセニイの如きは、問題とか思想とか生活相とかを放れて、たゞ珊瑚の鞭を手にして、思ふまゝベガサスに天馬を驅つて居る。

而も、ダンセニイの神秘主義が、メエテルリンクやイエーツなどと違つて居る點は、その中に宿つて居る一種の微妙サブツルなる皮肉である。彼の神秘主義には少しのセンチメンタリズムもない。ダンセニイの神は、異教的な神である。絶大な

力を持ちながら、常に人類の微弱さを嘲笑して居る神である。

ただ僅かに遺憾なことは如何なる作家も陥り易いやうに、「山の神々」や「旅宿の一夜」「神々の笑」などが、そのテーマの上に於て、やゝ類似して居ることである。

譯者松村みね子さんは、日本の文壇で自分の尊敬し得る少數の翻譯者の一人である。そして自分と同じく愛蘭文學の愛好者である、従つて、その翻譯は、愛蘭文學に對する愛から生れた良心的な仕事である。松村さんは、シングの「ブレイボーイ」を譯される時に、絶大の苦心をせられたことを自分は知つて居る。恐らく、ダンセニイを譯せらるゝに就ても、それと同程度の苦心をせられただらうと思ふ。一言一句の末までも、信頼して讀むことが出来る様に思ふ。

自分の序文を求められるためにも、數回わざ／＼自分を訪ねて下さつた。それに酬るためにも、もつと精しくダンセニイを紹介したいと思つて居たが、

自分の怠惰のためにかうした間に合せの序文を書いたことを、著者及び讀者諸子に御詫びをして置く。

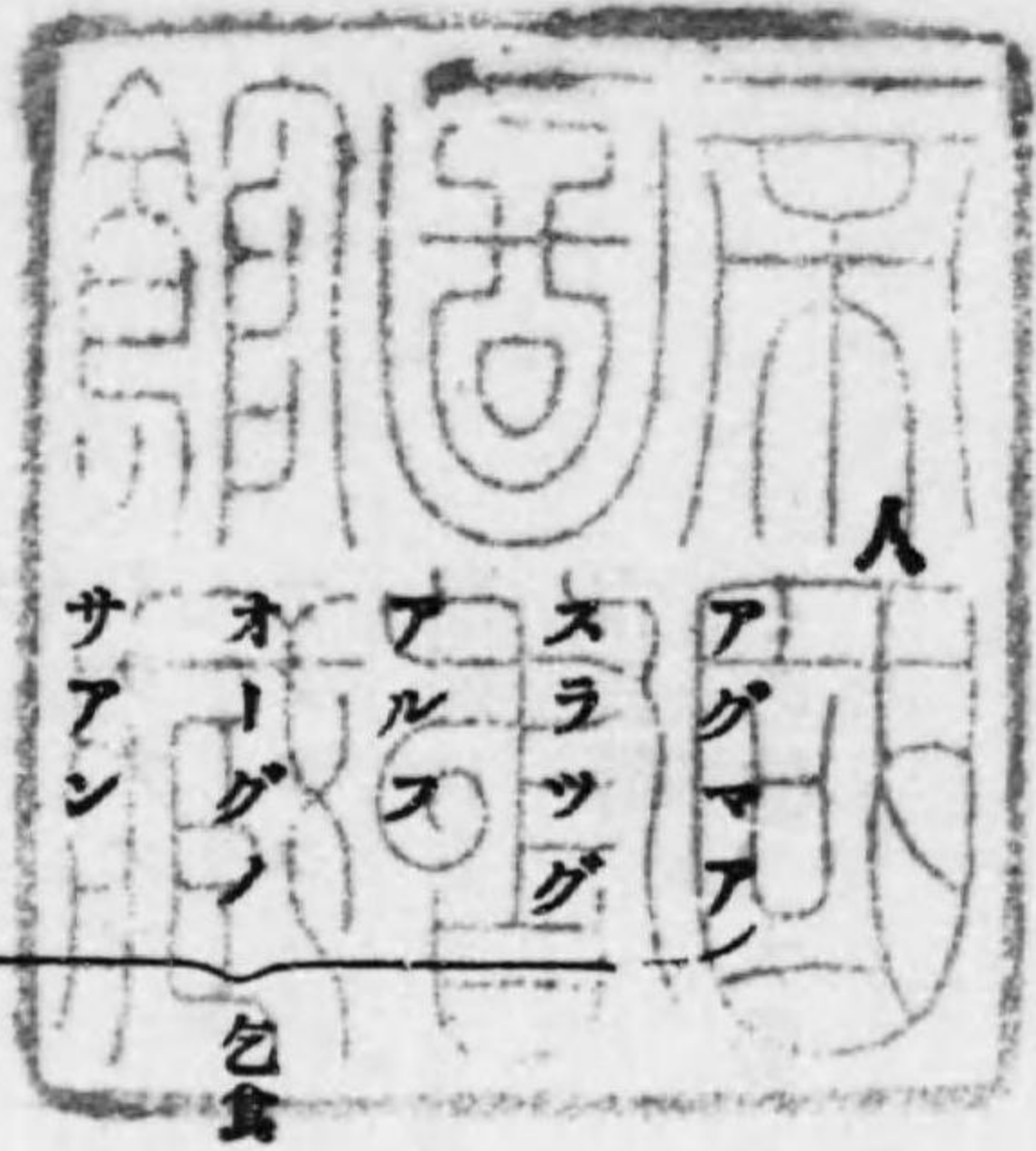
十月十日

菊池寛

目次

山の神々	一
アルギメネス王	五五
光の門	九五
アラビヤ人の天幕	一一三
神々の笑ひ	一五一
おき忘れた帽子	二三一
金文字の宣告	二五五
旅宿の一夜	二五八
女王の敵	三二三

山
の
神
々



山の神々

(三幕)



泥棒 一

オリランダア

イラナオン

市民

アクモス

駱駝に乗つた男たち

市民等

その他、大勢

處

東の方のある國

第一幕

市の城壁の外、三人の乞食等地に坐してゐる。

オーグノ。乞食渡世には悪い時世だなあ。

サアン。悪い時世だなあ。

アルフ。(他の二人より老年ながらまだ白髪にはならない男) この市の金持連には何事か悪い事でもあつたものか、此頃では慈善をやらかすのを樂みにしなくなつた、そして根性わるの吝嗇しほつくさい氣持になつちやつた。かはいさうなものさ！俺はあの連中のことを考へると時々は溜息が出る。

オーグノ。かはいさうになあ！ しわい心はさぞかし難義なものだらうて、サアン。まつたく、難義なことには違ひない、俺たちの商賣のためにも悪い。

オーグノ。(熟考しながら) もう斯うなつて幾月も立つ。あの人たちに何事が起つたのだらう?

サアン。何か悪いことが起つたのだ。

アルフ。近ごろ此世界に近く彗星が現はれて地球が焦げて暑くな●て來た、そのためか神々はぬむりを始めなすつて、人間の心の中にある神の性質が、つまり、慈善とか、酒に酔つばらふこととか、贅澤とか、歌とかいふものが次第に消えてなくなつてしまつたが、神々はその注ぎたしをしようともしなさない。

オーグノ。まつたく、この頃はあついなあ。

サアン。俺は毎晩彗星を見る。

アルフ。神々はぬむりをしてゐなさる。

オーグノ。もし神々が近々に眼を覺まして、此市を俺たち乞食社會に恥づかしくな

い市まちにしてくれなけりや、俺ひとりだけでも、もう此渡世に見切りをつけて店でも買はう、そしてゆつくりと日かげに坐つて、まうける算段でもやるかな。

サアン。お前が店を持つのか?

(アグマア及びストラツグ入り來る、アグマアはひどい服装をしてゐるが、丈高く、威嚴あり、アルフよりも老年である。ストラツグは彼に従つてゐる)

アグマア。いま話をしてゐたのは乞食か?

オーグノ。へえ、旦那さま、かはいさうな乞食でございます。

アグマア。乞食の職業は何時から始まつたものだ?

オーグノ。始ての都市まちが出来た時から始まつたものです。

アグマア。そんなら、何時の時代に乞食で商賣を始めたものがある? 何時の時代に値切つたり勘定したり店に坐つたりしたものがある?

オーグノ。へえ、そんな奴はありませんなあ

アグマア。それでは、お前がこの職業を捨てる始めての奴だな？

オীগノ。此處では時世が悪うござんしてな。

サアン。まつたく時世が悪いんだ。

アグマア。それでお前は此職業を捨てるのか？

オীগノ。この市まちが我々の職業に不向きなんです。神々は居眠りをやりなさるし人間の善い心はみんな死んでしまふし。(第三の乞食に) 神々は眠ねてゐなさるんだなあ？

アルフ。神々は遠いマルマのお山で居眠りをしてゐなさる。七人の緑色のお像は眠ねてゐなさる。わしどもに小言をいふお前さんは何だ？

サアン。親方さん、お前は偉い商人あきんばさんかい？ ひもじがつてる貧乏人を助けておくんなさらないか？

スラツグ。俺の親方を商人あきんばだと！ どうして、どうして、商人ぢやない。親方は

商人ぢやない。

オীগノ。身なりをやつした貴族さんに違ひない。神々が眼を覺ましてわしどもを助ける爲に此人をよこして下すつたんだらう。

スラツグ。なんの、なんの、お前たちは俺の親方を知らない。お前たちは知らないんだ。

サアン。ぢやあ、わしどもに小言をいふためソルダン様が假に姿を現はしなすつたのか？

アグマア。あれは乞食だ、老年乞食だ。

スラツグ。(大得意で)俺の親方ぐらゐの人がまたとあるものか。どんな遠國の旅人たひびとだつて斯んな智慧者に會つたことはあるまい、エチオピアから來た旅人たひびとだつて。アルフ。わしどもの此市まちへよくこそ來ておくんなすつた、いま市まちには災禍わざはひが來て、乞食渡世には悪い時節だが。

アグマア。道路のうら路も知つてるお前たち、毎朝毎朝あたらしく吹き出す風にも觸れたお前たち、人間の魂から尊い慈悲心呼び起したこともあるお前たち、そのお前たちが商賣のはなしや店と商人のけちくさい利得ばなしをするのは止めて貰はう。

オীগノ。わしはうつかり云つたことだ、時世が悪いんでな。

アグマア。俺が時世を直してやる。

スラツグ。俺の親方がやつて出来ないといふことはない。

アグマア。(スラツグに) 黙つて聞いてる。俺は此市を知らない。俺は遠方から来たものだ、アツカラの市を荒し盡してから。

スラツグ。俺の親方はアツカラの市で三遍馬車にひき倒されて怪我をした、一遍殺されたこともある、それから七遍打たれて泥棒された、それで其度毎にたつぷりと賠償金を貰ひなすつた。九遍も病氣になりなすつて、たび／＼死にさう

なこともあつたが――

アグマア。スラツグ、黙つてゐる――このお前たちの仲間に泥棒はゐないか？
アルフ。親方、此處で泥棒といつてるものもちつとはあるがね、お前さんの眼には泥棒とも見えまいよ、あんまり上等の泥棒ぢやないんだからな。

アグマア。極く上等の泥棒が入用なのだ。

(二人の市民、イラナオンとオーランダア立派な服装して入場)

イラナオン。だから、アルダスベスマで船をやることにしよう。

オーランダア。銀の門から真直ぐにアルダスベスマで入れるか？

(アグマア長い杖の太い柄を左の腋の下に移してそれに倚りかゝる。杖は彼の全身の重みを支へる。忽ち彼は真直ぐな身體ではなくなつてしまふ。右の手はぶらり力なくぶらさがる。彼はよろよろと市民のほゞり近く進んで蕪を乞ふ)

イラナオン。せつかくだが、やれないよ、こゝいらにはあんまり澤山乞食がゐる

ので、市の利益の爲にも施しは止めることにした。

アグマア。(地に坐して泣く) わたくしは遠くからまゐりましたもので。

(イラナオン再び戻つて来てアグマアに銅貨をやる。イラナオン退場。アグマア前の如く眞直ぐな身體になつて他の一同の許に歩いて来る)

アグマア。俺たちは好い着物が入用だ。泥棒にすぐ出懸けて貰はう、成るべく緑色の上着が欲しいものだ。

乞食。わしが行つて泥棒を連れて来ませう。(退場)

アルフ。俺たちは貴族の眞似して市の奴等を痛めてやらう。

オーグノ。さうだ、さうだ、俺たちは遠國から来た大使だといつてやらう。

スラツグ。(アルフに小聲でいふ) お前たちは俺の親方を知らない。貴族の眞似して行

かうとお前がいひ出したから、きつと親方はもそつと好い工夫をやるだらう。

王様の眞似して行かうといひ出すかも知れない。

アルフ。乞食が王様になるのか？

スラツグ。うん。お前たちは俺の親方を知らない。

アルフ。(アグマアに) わしどもに、どうしろといひなさる？

アグマア。俺がいつたやうに先づ好い着物を着るのだ。

アルフ。それから、どうする？

アグマア。それから、おれたちは神様になつて行かう。

乞食共。神様になつて！

アグマア。神様になつて。俺が流浪の旅に近頃通り過ぎた國をお前たちは知つてゐるか？ マルマといふ土地だ。その山の緑岩で彫つた神がある。その七人の

神々は山を後にして坐つてゐる。じいつと其處に坐つて旅人がそれををがんで行く。

アルフ。うん、うん、その神ならわしどもも知つてゐる。この土地でも大變に信

仰されてゐる。併し其神々だつて居眠りをやつてゐなされると見えて、わしどもに何もけつかうな物を下しては下さらなう。

アグマア。その神々は緑の色だ。兩足をあぐらかいて、右の腕を左の手に載せて、右の人差指で上の方を指して坐つてゐる。俺たちは服装みなりを變へて、マルマの方角から市に入り。その神々だといつてやらう。あの神々の通りにおれたちも七人ゐなければならぬ。すわる時にはあの神々のとほりにあぐらかいて、右の手を上あごに舉げて坐るのだ。

アルフ。もしそれでこの市の壓制者の手に落ちたら大變だ、商人に慈善心がとほしいとほり裁判官には親切心が乏しい、神々が慈善心も親切心もわすれなすつたからだ。

アグマア。おれたち祖先傳來の此職業では、一人の人間が同じ町の隅に五十年も坐つて同じことをやつてゐるかも知れない、併しその男が起ち上がつてほかの

仕事をする日が来るかも知れない、臆病者はたゞ餓えるばかりだ。

アルフ。併し神々を怒らせるのはよくないことだ。

アグマア。すべての人間の一生は神々に乞食するのではないだらうか？ 凡ての人間が絶えず物をねだつてゐるのを神々は見てはゐなさないか、香をたき鐘を鳴らし利口なもくろみをして施捨ほしこしを求めてゐるのを？

オীগノ。さうだ、すべての人間が神々の前には乞食だ。

アグマア。強いソルダン様も始終その尊い神殿かみやの瑪瑙の祭壇に坐つてゐなさるではないか、ちやうどおれたちが町の隅や御殿の門の傍に坐るやうに？

アルフ。それはさうだ。

アグマア。そんなら俺たちが新規な智慧と工夫で此神聖な職業をやりつゞけて行つたら、神々も悦びなさるだらう、聖僧せんそうたちが新しい賛歌を唄へば、悦びなさるのと同じわけで。

アルフ。併しわしは恐ろしい。

(二人の男たち話しながら入場)

アグマア。(スラツグに) お前は俺たちに先だつて市まちに入り、市まちに豫言をふり撒くのだ、山の緑岩で彫られた神々が人間の姿してマルマから此市まちに来る日があると、いふ豫言を。

スラツグ。承知しました、親方、わしが自分でその豫言をやりますか？ それとも何か古い巻物にでもあることにしますか？

アグマア。誰か、或時なにか珍らしい書物の中で讀んだことにするがよい。市場でその豫言の話をやらせろ。

スラツグ。やらせませう。

(スラツグ躊躇する。サアン及び一人の泥棒入場)

オーグノ。これが仲間の泥棒です。

アグマア。(勵ますやうに) はしつこさうな泥棒だな。

泥棒。親方、わしは緑色みどりいろの上着をたつた三枚だけしか手に入れられませんが、現今

は市まちにもあまり澤山はないやうです。それに、どうもうたぐり深い市まちでして、

其疑り深いのを恥とも思はない奴等ですから。

スラツグ。(二人の乞食に) これは泥棒するわけぢやないからなあ。

泥棒。親方、わしはこれで精いつばいですが、わしも生れて以來一生どろばうの修行をやつてゐたわけでもありませんから。

アグマア。お前も手に入れたものがあるのだから、それが何か役に立つ。お前は何年ぐらゐ泥棒の修行をした？

泥棒。わしは十歳じっさいの時ときはじめて盗みました。

スラツグ。(驚いて) 十歳じっさいの時ときだと？

アグマア。その赤着を裂いて七人で分けるのだ。(サアンに) もう一人乞食を連れて

来てくれ。

スラツグ。俺の親方が十歳の時には、もう二つの市から夜逃げ出すやうな始末だつた。

オーグノ。(感嘆して)二つの市から？

スラツグ。(うなづく)親方の生れ故郷の市ではルウナアの神殿にあつた黄金の杯がどうなつたか、いまだに知るものはあるまい。

アグマア。さうだ、七切れに分けるのだ。

アルフ。俺たちはみんなでその切れを襦袢の上に着るんだ。

オーグノ。さうだ、さうだ、俺たちも立派に見えるだらう。

アグマア。服装を換へるに、それでは駄目だ。

オーグノ。ぼろを隠さないんですか？

アグマア。いやいや、誰でもよく視れば直ぐ分かる、これはたゞの乞食だ、それ

が服装を換へたばかりだと。

アルフ。それではどうやるんだ？

アグマア。七人のひとりひとりが緑衣の一切を襦袢の下に着けるのだ。ぼろのあちこちからその切が少しづつ見えるだらう。さうしたら人はいふだらう、此七人の人たちは乞食の風をしてゐる、併し何者だか分からないと、

スラツグ。何と利口な親方だらう！

オーグノ。(感嘆して)乞食だなあ！

アルフ。老年乞食だなあ！

(幕)

第二幕

一八

ユングロス市の市會場。市民及び其の他。 七人の乞食等襤褸の下に緑色の衣を着けて入場。

オーランダア。お前たちは何者、そして何處から来た？

アグマア。わしどもが何者か、又どこから来たものか、誰に返事が出来やう。

オーランダア。その乞食どもは何だ、なにしに此處へ来た？

アグマア。わしどもが乞食だと誰がお前にいうた？

オーランダア。その人たちは何しに来たのか？

アグマア。わしどもが人だと誰がお前にいうた？

イラナオン。さてさて、お月さんにかけて、不思議なことだ。

アグマア。あれはわしの妹ぢや。

イラナオン。なにつ？

アグマア。わしの小さい妹ぢや。

スラツグ。わしどもの小さい妹の月。彼女は夕方になれば遠いマルマの山のわしどものところに来てくれる。彼女は若いうちは山の上を駆けてあるく。わかくてからだのほそいうちは彼女はわしどもの前に来て踊つてくれる、年をとつて姿がわるくなると、山から逃げ下りて行つてしまふ。

アグマア。彼女はまた若くなる。永久に若くてはしい。彼女は踊りながら又歸つて来る。年齢は彼女の姿を曲げることは出来ぬ、彼女の兄弟どもの髪を白くすることも出来ぬ。

オーランダア。これは變つた話だな。

イラナオン。世間月なみのことではありませんな。

アクモス。豫言者も考へつかなかつたことだ。

一九

スラッグ。月は又新しくわかくなつてわしどもの處に来てくれる、古い戀愛を憶うて。

オーランダア。豫言者がやつて来て我々に話をしてくれれば結構だ。

イラナオン。これは過去になかつたことだ。豫言者は来るがよい。豫言者に我々の未來のことをきかして貰はう。

(乞食等マルマの山の七人の神たちの姿勢をして床に坐る)

市民。今日市場で人々のはなしを聞いた。古いむかしの豫言を何處やらで誰かど讀んだことがあるといつてゐた。その豫言は七人の神様が人間の姿になつてマルマから降りて來るといふことださうな。

イラナオン。それは眞實の豫言か？

オーランダア。我々はそれよりほかに豫言を知らぬ。豫言を知らない人は海圖にない海を夜行く船のりのやうなものだ。何處に岩があるか何處に港があるかも

知らぬ。水先案内の頭の上は何もかも眞暗で星も導いてはくれぬ、どの星がどの星であるかも分からぬ。

イラナオン。此豫言を調べて見ようではありませんか？

オーランダア。この豫言を信じよう。それは小さいおぼつかない提灯の光のやうなものかも知れぬ、あるひは酔ひしれた男がそれを持ち歩いてゐるのかも知れぬ、それにしても何處かの港の岸に沿うて行く光であらう。我々はそれに依つて導かれなければならぬ。

アクモス。ひよつとしたら、あの人々は慈悲深い神なのかも知れません。

アグマア。わしどもの慈悲より大なる慈悲はない。

イラナオン。それはさいはひ、我々の身に災禍を持って來はしないだらう。

アグマア。わしどもの怒りほど恐ろしいものはない。

オーランダア。もし此人たちが神ならば、供物を上げなければならぬ。

アクモス。我々は請んであなた方ををがみませう、もし神ならば。

イラナオン。(同じく跪く) あなた方はすべての人類よりも力つよく、ほかの神々の中にも高い位置にあつて、この我々の市をも支配なされます、かみなりも旋風も日月の蝕も人間種族のすべての運命もすべてあなた方のおもちやでございませう——もしあなた方が神ならば。

アグマア。かねて定められし疫病も今しばらく此市に来るな、地震よ雷のうめきの中に此市をいま一口に吸ひ込むな、激しき敵軍は逃るゝ者をみなごろしにするな——もし我等が神ならば——

民衆。(恐怖を以て) もし神ならば!

オーランダア。さあ、供物をあげよう。

イラナオン。小羊を持つて来い。

アクモス。早く、早く! (或る人々出て行く)

スラツグ。(おごそかな様子で) この神様はありがたい神様だ。

サアン。ありきたりの神様ではない。

ムラン。この神が我々を造つてくれたのだ。

市民。(スラツグに) あの神様は私共をお罰しなさりはしますまいか? どの神様も私どもをお罰しなさりはしますまいか? 私共は供物をあげます、よい御供物をあげます。

他の市民。祭司様がお祝しなされた小羊をお供へいたします。

前の市民。私共のことで怒つておいでなさいますか?

スラツグ。あのかしらの神の御心に如何なる運命の雲が巻き起つてゐるか誰に分らう? あの神は我々のやうにへばい神ではない。ある時、羊飼が山の中であの神と行き會うた。羊飼は歩きながら心に疑つた。あの神はその羊飼を罰しなされた。

市民。私どもは疑ひはいたしませぬ。

スラツグ。羊飼はその夕方、山の中で死んでゐた。

第二の市民。立派なお供物を捧げることにはいたします。

(人々死んだ小羊と果物を持って再び入場、彼等は祭壇の火のあるところで小羊を捧げ、祭壇の前に果物を捧げる)

サアン。(祭壇の上の小羊の方に手を伸して) あの脚のところがちつとも焼けてゐない。

イラナオン。神々が小羊の脚の焼ける焼けないの心配をするとは不思議だ。

オーランダア。實に不思議だ。

イラナオン。いま口をきいたのは人間だとわしはいひたいくらゐだ。

オーランダア。(髭を撫でながら第二の乞食を凝視して) 不思議、實に不思議。

アグマア。神々が焼けた肉を愛するのが何の不思議か？ 神々が稻妻を用ゐるの

もそのためである。稻妻が人間の手足にきらめく時、マルマの山の神々の許に

は快い香りがする、肉の焼ける香りがする。時として神々は、心のおだやかな

時、人間の肉の代りに小羊の肉を焼かせてよろこんでゐる。神には何も同じこ

となのぢや。肉を焼くことはもう止めてくれ。

オーランダア。いえ、いえ、山の神様！

他の人々。どうぞ、どうぞ。

オーランダア。早く、肉を捧げよう。もし食べてくれれば、無事だ。

(彼等肉を捧げる、乞食等食ふ、アグマアのみ食はず、見てゐる)

イラナオン。無智なもの、何も知らぬものは、あの神々がひもじい人間のやうに

食べてゐると、いふかも知れぬ。

他の人々。しつ！

アクモス。長いあひだこんな食事をしたことがないやうな様子に見える。

オーランダア。ひもじさうな様子だ。

アグマア。(食へないで) わしは此世界がまだ新しく人間の肉が今よりも柔かであつた時食つた切りだ。この年若としわかの神々は物を食ふことを獅子から習うたのぢや。

オーランダア。あゝ御老年おとしよりの神様、めしやがりませ、めしやがりませ。

アグマア。わしのやうなものが物を食ふのは不似合ぢや。物を食ふは獸と人間とわかい神たちばかりぢや。日も月も疾き稻妻もこのわしも——わしどもは人を殺し人を狂はせましょう、わしどもは物は食はぬ。

アクモス。もしあの神がこの供物くもつを食べてくれれば、我々に災禍わざはひを下すことはあるまい。

一同。あゝ御老年おとしよりの神様、どうぞめしやがりませ、めしやがりませ。

アグマア。もう十分だ。この神たちが獸や人間の眞似しただけで、もう十分であらう。

イラナオン。(アクモスに)だが、あれは、つい先日こないだ私が會つた乞食によく似てゐる。

オーランダア。しかし乞食は物を食ふ。

イラナオン。私が思ふに、ウォルダリイ酒を出されて飲まずにゐる乞食はあるまいと思ふ。

アクモス。あれは乞食ではない。

イラナオン。それにしてもウォルダリイ酒を一杯捧げて見ませう。

アクモス。あなたがあの人を疑ふのは罪だ。

イラナオン。私はあれが神だといふことを確かめたいと思ふばかりだ。ウォリダリイ酒を持つて來ませう。(退場)

アクモス。飲むものか。併しもし飲んでくれれば、我々に罰は下すまい。酒を捧げよう。

(イラナオン杯を持つて再び入場)

第一の乞食。ウォルダリイ酒だ!

第二の乞食。ウォルダリイ酒のさかづき！

第四の乞食。あゝありがたい！

ムラン。あゝうれしい！

スラツグ。あゝ利口な親方！

(イラナオン杯を取りあげる。一同の乞食どもアグマアまでも一緒に手を出す。イラナオン杯をアグマアに渡す。アグマア嚴然と受取り、やがて非常に落ちついて酒を地にこぼしてしまふ)

第一の乞食。こぼしてしまつた。

第二の乞食。こぼしてしまつた。

(アグマア酒の氣を嗅ぐ)

アグマア。折に適うた灌奠^{みそぎ}ぢや、我等の怒りも少しは和らいだ。

他の乞食。ウォルダリイだのに！

アクモス。(アグマアの前に跪く)我が主よ。私には子供がございません、私は――

アグマア。もう、わしどもの邪魔をしてくれるな。今は神々が神々の言葉を以て神々と物いふ時刻である。もし人間がわしどもの話を聞いたら、おのが未來を察することも出来るであらう、それは人間の不爲だ。さがりなさい！ さがりなさい！

残つた一人。我が主よ――

アグマア。さがりなさい！

(その人退場。アグマア一片の肉を取つて食し始める、乞食等立ち上がりのびをする。皆笑ふ、アグマアだけはひもじさうに食ふ)

オーグノ。あゝ！これで身上にありつけた。

サアン。これで貰ひがある。

スラツグ。親方！利口な親方！

アルフ。よい日が来た、よい日が来た。だが、俺は怖ろ。

スラツグ。何が怖い？ 何も怖いことはない。俺の親方のやうな利口な人間はほかにないのだがら。

アルフ。俺は俺たちが真似してゐるその神々が怖い。

スラツグ。神々が！

アグマア。(肉の切を唇から取りながら)スラツグ、此處へ来い。

スラツグ。(アグマアの側に行く)なんです、親方？

アグマア。俺が食つてゐるあひだ戸のところ番をしてゐる。(スラツグ戸口に行く)神の恰好をして坐つてゐる。もし誰か市のものがやつて来たら、知らせてくれ。(ス

ラツグ、神の姿勢をして戸口に坐る、見物に後を向けて坐る)

オীগノ。併し、親方、ウォルダリイ酒は飲めないんですか？

アグマア。だんぐにのぞみどほりになる。はじめ少しの辛抱が肝心だ。

サアン。親方、誰か疑つてはゐますまいか？

アグマア。わしどもはよつぽどうまくやらなけりや。

サアン。もし、うまくやらなけりや？

アグマア。そりやあ、その時は死が来るばかり——

サアン。親方！

アグマア。——ゆつくりと。

(一同不安らしく動く、スラツグのみは動かすにじつと坐つてゐる)

オীগノ。親方、あの連中はわしどもを信じてゐるでせうか？

スラツグ。(少し首を動かして)誰か來ました。(スラツグもこの位置に直る)

アグマア。(肉を押しやりながら)さあ、それも直き分かる。(一同神の姿勢を真似る。一人の男

入場)

男。わたくしは物をあがらない神様におめにかゝりたうございます。
アグマア。わしがさうだ。

男。我が主よ、わたくしの子供は今日ひる頃毒蛇に咽喉を咬まれました。どうぞあの子の生命をお助け下さいまし。まだ息はございます、絶え絶えではございませんが。

アグマア。その子はまつたくお前の子か？

男。それはもう、わたくしの子に相違ございません。

アグマア。その子が健康の時分、お前はつねづねその子のあそびの邪魔をしたか？

男。あの子の邪魔をしたことはございません。

アグマア。死は誰の子であらう？

男。死は神々様のお子でございます。

アグマア。自分の子供の遊戯の邪魔をしたことのないお前が神々にこの願ひをするのか？

男。(アグマアの意味を理解して、恐怖を以て) あゝ主よ！

アグマア。泣くな。人間の造つたすべての家々は神々の子なる死の遊び場である。

(男泣かずに無言のまま立ち去る)

オーグノ。(サアンの腕を握り) この人は、ほんとに人間だらうか？

アグマア。人間だとも、人間だとも、それもつい今の今まで、腹のへつた人間だつた。(幕)

第三幕

三四

同じ室。数日の後。山の巖石の如き形の七つの神座が舞臺後方に並んでゐる。その上に乞食ども
寝そべつてゐる。泥棒は不在。

ムラン。乞食がこんな目に遇ふのは始めてだ。

オーグノ。あゝ、くだものと柔かい子羊と！

サアン。ウォルダリイ酒と！

スラツグ。果物よりも子羊よりもウォルダリイ酒よりも、俺の親方のうまい巧ら
みを見てゐるのはなほさら愉快だ。

ムラン。さうよ！ あの連中が、行つてしまつたら親方が食ふかと思つて、のぞき
に來た時はなあ！

オーグノ。それから神と人間との問題で質問した時もなあ！

サアン。それから、奴等がなぜ神が癌を許可して置くかなんて聞いた時もなあ！

スラツグ。あゝ、親方は利口だ！

ムラン。親方の思はくはうまくいつたなあ！

オーグノ。ひもじい思ひも遠くへ行つてしまつた！

サアン。なんだか去年の夢の中の氣持のやうでもあるし、ずうつと古いむかしの
短か夜の苦勞のやうでもある。

オーグノ。(笑ふ)はつ、はつ、はつ！ あいつらが俺たちに祈るのを見ちやな
あ！

アグマア。俺たちが乞食の時分には俺たちも乞食のやうな口をきいたぢやない
か？ 俺たちもあいつらと同じやうに泣きごとをいつたぢやないか？ 俺たち
の表情もあいつらと同じやうに卑しかつたぢやないか？

三五

オーグノ。わしどもは乞食の中でも威張つたものだつた。

アグマア。それなら、今度は俺たちは神になつたのだから、神らしくしよう、そして禮拜に来る奴等を馬鹿にしないことにしよう。

アルフ。神々は禮拜者を馬鹿にしてゐるとわしは思ふが。

アグマア。神々はこの我々を馬鹿にはしなかつた。我々は夢にも見なかつた山の絶頂てつぺんまでのぼつたではないか。

アルフ。人間が高くのぼれば、誰よりも先づ神々がその人間を馬鹿にするのが掟きまりりのやうにわしは思ふ。

泥棒。(入場)親方！ わしは何でも知つてゐて何でも見てゐる奴等の處に行つて來ました、泥棒の處に行つて來たんです。やつらはわしを自分たちの仲間の一人とは知つてゐますが、此方こちらの仲間の一人とは知りません。

アグマア。ふん、それで！

泥棒。親方、危険です、非常に危険です。

アグマア。俺たちを人間だと疑つてゐるといふはなしか？

泥棒。もうそれは疾うから疑つてゐます。わしがいふのは、あいつらがほんとの事を知るだらうといふことです。そしたら我々は破滅です。

アグマア。それではあいつらは知らないんだ。

泥棒。まだ知りません。併し今に知れるでせう、そしたら我々は破滅です。

アグマア。いつ知れる？

泥棒。三日前からあいつらは我々を疑つてゐます。

アグマア。お前が思ふよりもつと大勢が我々を疑つてゐた、併し誰かさういひ出すものがあつたか？

泥棒。いゝえ、ありません。

アグマア。そんなら、怖がるのは止める、どろばう君。

泥棒。三日前に、二人の男が駱駝に乗つて、マラムの山にまだ神々があるかどうか
と見に行きました。

アグマア。マラムに行つたと！

泥棒。へえ、三日前に。

オীগノ。もう駄目だ！

アグマア。三日前に行つたのか？

泥棒。へえ、駱駝に乗つて。

アグマア。今日歸つて来るな。

オীগノ。もう駄目だ！

サアン。駄目だ！

泥棒。その人たちは緑石の神像が山をしょつて坐つてゐるのを見たでせう。そして「神々はやつぱりマラムにいでなさる」といふに違ひありません。そして

ら、我々は焼き殺されます。

スラツグ。親方はまだ何か工夫するだらう。

✓アグマア。(泥棒に)こつそりと何處か高いところに行つて野の方を見てくれ、まだ

工夫する時間があるかどうか。

スラツグ。親方はい、工夫をなさるだらう。

オীগノ。あの人のおかげで我々はわなに落ちてしまつた。

サアン。あの人の智慧が我々の破滅だ。

スラツグ。まだくゝいゝ工夫をなさるだらう。

泥棒。(再び入場)もう駄目です！

アグマア。駄目か？

泥棒。駱駝の人たちが此處へやつて來ました。

オীগノ。もういけない！

アグマア。黙つてろ！ 俺は考へて見る。

(彼等一同靜かに坐してゐる。市民等入り來り跪き拜する。アグマアじいつと考へ込んでゐる)

イラナオン。(アグマアに) あなた様がたが山をお降りなされぬ前に始終坐つておいでなされました尊い聖壇おみやに信心ぶかい二人の巡禮が行つてまゐりました。(アグマア何も答へず黙す) その者どもが只今歸つてまゐりました。

アグマア。わしどもを此處に捨て、置いて、神々を探がしに行つたのか？ ある時一疋の魚が海を探がしに遠國まで旅をしたさうだ。

イラナオン。尊い神様、あのものどもの信仰は深うございますので、あなた様がたの聖壇おみやをさへをがみ度くて行つたのでございます。

アグマア。わしはさういふ信仰の深い人たちを知つてゐる。さういふ人たちは屢々わしの前に祈つた、併し彼等の祈りは受け容れられぬ。彼等は神を愛するのではない、彼等の愛するものは彼等自身の信仰である。わしはさういふ信心深

い者どもを知つてゐる。彼等は七人の神々がまだマルマにゐたといふであらう。わしどもがまだマルマにゐたと彼等は詭りをいふであらう。彼等自身のみが神々を見て來たやうな顔をすれば、お前がたの眼には彼等が一段と信心深く見えるであらう。馬鹿者どもは彼等を信じ地獄の罰も共々に受けるばかりぢや。

オーランダア。(イラナオンに) これ！ あなたは神を怒らせてゐる。

イラナオン。わしが怒らせたのは神か人かわしは知らぬ。

オーランダア。神かも知れぬ。

イラナオン。マルマから來た男たちは何處にゐる？

市民。駱駝の人たちがまゐりました。只今此處にまゐります。

イラナオン。(アグマアに) あなた様がたの聖壇おみやから歸りました聖い巡禮共があなた様がたををがみにまゐりました。

アグマア。この者どもは神を疑ふものである。神々は疑ひといふその名をも憎む。疑ひは常に善を汚すものである。お前たちの清き心をくもらせぬやうにそのものどもを獄に入れてしまへ（立ち上がる）此處に入れてはならぬ。

イラナオン。あゝ併し、尊い山の神様、わたくしどもも疑つてをります、尊い山の神様の。

アグマア。お前たちは自ら選んだ。お前たちはその道を選んだのだ。併しまだ時はある。悔い改めてそのものどもを獄に入れよ、まだ時はある。神々は決して泣いたことはない。併し神々も數萬の骨を枯す永劫の罰とくるしみを思ふ時、もし神でさへなかつたら、神々も泣きたくなるであらう。さあ早く！ お前たちのうたがひを悔い改めよ。

（駱駝の人々入る）

イラナオン。尊い神様、それは力づよい疑ひでございます。

市民。あの人は何ともされやしない！ 神ではないのだ。

スラツグ。（アグマアに）親方、工夫があるでせう。工夫があるでせう？

アグマア。まだ出ないよ、スラツグ。

イラナオン。（オーランダアに）これがマルマの神の聖壇（おみやげ）に行つた人たちです。

オーランダア。（高くはつきりした聲で）山の神々はまだマルマにおいてなされたか、それとも、もうおいでなされぬか？

（乞食ども急いで其神座から立ち上がる）

駱駝の人。神々はマルマにはおいでなさいませぬ。

イラナオン。おいでなされぬ？

駱駝の人。神々のお座は空虛（から）でございました。

オーランダア。これこそ山の神々様！

アクモス。まつたくマルマからおいでなすつたのだ。

オーランダア。さあ、みんなで行つて供物の用意しよう。我々のうたがひの罪の償ひにすばらしい供物をあげよう。(退場)

スラッグ。利口な親方!

アグマア。いや、いや、スラッグ、何事が起つたのか俺には分からぬ。二週間前に俺がマルマを通つた時には、^{みどり}緑石の像はまだ^{あそこ}彼處に坐つてゐたのだ。

オーグノ。俺たちは助かつた。

サアン。まつたく助かつた。

アグマア。俺たちは助かつた、併しどうして助かつたのか俺は知らぬ。

オーグノ。乞食が斯んな思ひをするのは始めてだ。

泥棒。わしは行つて見張りをしませう。(泥棒忍び出る)

アルフ。だが、俺は怖い。

オーグノ。怖い? 俺たちは助かつたんだよ。

アルフ。よんべ俺はゆめを見た。

オーグノ。どんな夢だ?

アルフ。なんでもない夢だつた。夢で、俺はのどが渴いてゐたら誰だかウォルダリ酒を飲ましてくれた。併しその夢の中でもなんだか俺は怖かつた。

サアン。俺はウォルダリ酒を飲めば怖いものがなくなる。

泥棒。(再び入場)あの連中は我々のために愉快な御馳走の仕度をしてゐます。小羊を殺したり、娘たちは果物を持つて來たりしてゐます、ウォルダリ酒も澤山ありさうです。

ムラン。乞食が斯んな思ひはまだしたことがない。

アグマア。俺たちをまだ疑つてるものがあるか?

泥棒。わしには分かりません。

ムラン。何時御馳走が始まる?

泥棒。星が出る時分から。

オーグノ。あゝ！もう日の入方だ。うんと食べるんだなあ。

サアン。娘たちが頭に籠を載つけてやつて来るのも見られるな。

オーグノ。籠には果物が這入つてるだらう。

サアン。谷のいろいろな果物が。

ムラン。あゝ、俺たちがこの娑婆の道を歩いて来たのも随分長いことだつた！

スラツグ。うん、随分ひどい道だつた！

サアン。ずるぶんほこりだらけの道だつた！

オーグノ。めつたに酒も飲めなかつた！

ムラン。随分ながいこと俺たちはお願い申しお願い申した、それもほんとの僅か

のものゝ爲にだ！

アグマア。今度といふ今度こそ何でも思ふ存分になるこの俺たちだ！

泥棒。いろいろな好い物が盗まないうで取れることになつたら、わしの術もにぶりはしまいか？

アグマア。もうお前の術もいらなくなる。

スラツグ。親方の智慧でわしどもの一生は十分だ、

(ものに怯じた男入場。アグマアの前に跪き額を床にすりつける)

男。お願いいたします、市の者まごがお願いいたします。

(アグマア及び乞食等神の姿勢に坐して黙す)

男。主よ、恐ろしうございます。(乞食等なほ黙してゐる) あなた様がたが夕方お歩き

になりましたは恐ろしうございます。夕方の沙漠の端はては恐ろしうございます。

あなた様がたをお見かけ申して子供たちは死にました。

アグマア。沙漠で？何時わしどもを見た？

男。昨晚でございました。昨晚のあなた様がたは恐ろしうございました。くらが

りのあなた様がたは恐ろしうございました。お手をお伸しなすつて物を探つて
おいでなさいました。あなた様がたは此市を探つておいでなさいました。

アグマア。昨夜か？

男。くらがりであなた様方は恐ろしうございました！

アグマア。お前自身でわしどもを見たのか？

男。はい、あなた様がたは恐ろしうございました。子供たちもお見かけ申して、
死にましてございます。

アグマア。お前がわしどもを見たといふのか？

男。はい、只今のやうな御様子でなく、違つていらつしやいました。どうぞも
う、晩がたお歩き下さいませんやうに願ひいたします。くらがりのあなた様
がたは恐ろしうございます。あなた様がたは——

アグマア。わしどもが今と違つた様子で現はれたとお前はいふが、どんな様子で

現はれたのか？

男。違つて居りました、違つて居りました。

アグマア。併し、わしどもがどんな風にお前に見えたのか？

男。あなた様がたはすつかり緑色みどりでいらつしやいました。くらがりの中ですか
り緑色みどりにお見えになりました、お山においてなされた時分のやうにすつかり岩
にお見えになりました。人間のやうな肉のおからだをおがみ申すことはよろ
しうございますが、岩がお歩きになりましたは恐ろしうございます、恐ろしう
ございます。

アグマア。それではわしどもがさういふやうにお前に見えたのだな？

男。左様でございます。岩はお歩きなされませぬものではございません。子供
がそれを見ましたところでのみ込めませぬ。岩は夕方なぞお歩きなされるもの
ではございません。

アグマア。近頃疑ふ者が出来て来た。それらは満足したらうか？
男。彼等は恐入つて居ります。どうぞお慈悲をお願ひ申します。
アグマア。疑ふのは罪である。行きて信ぜよ。

(男立ち去る)

スラツグ。親方、何を見たのでせう？

アグマア。自分たちの恐怖心が沙漠に躍つてゐるのを見たのだらう。日が暮れて
後なにか緑いろしたのを見たのだらう、それを何處ぞの子供がおれたちを見
たというて人に話したのであらう。何を見たのかおれは知らぬ。何が見えようぞ。
アルフ。何者か沙漠から此方こつちをさして来るとあの男がいつてゐた。

スラツグ。何が沙漠から来るのだらう？

アグマア。馬鹿なやつらだ。

アルフ。あの男は蒼い顔をしてゐた、何か恐ろしいものを見たのだらう。

スラツグ。恐ろしいものを？

アルフ。あの男のあの蒼い顔は何か恐ろしいものに會つたに違ひない。

アグマア。やつらを嚇かしたのは我々だ、やつらは怖いので馬鹿になつたのだ。

(僕一人松火或は提灯を持って入場、あかりを壘に載せて退場)

サアン。これで饗宴にやつて来る娘たちの顔が見える。

ムラン。乞食がこんな思ひをするのは始めてだ。

アグマア。そら！ やつて来る。足音がきこえる。

サアン。踊り娘たちだ！ やつて来る！

泥棒。笛の音が聞えない、音楽に伴れて来るといつてゐたが。

オীগノ。何といふ重い靴をはいてるんだらう。まるで石の足のやうにひびく。

サアン。あの重たい足音を聞くのはいやだ。俺たちのために踊つてくれるのは軽
い足つきのものでなけりや。

アグマア。しなやかなやつらでなけりや俺は笑つてやらないつもりだ。
ムラン。随分のろのろ来るなあ。もつとはしつこく来さうなものだ。
サアン。踊りながら来さうなものだが。あの足音はまるで重たい棒の足音みたい
だ。

アルフ。(殆ど歌を唱ふやうに、大聲で) わしは恐ろしい、何だか胸さわぎがする。わし
どもは七人の神々の前に悪い事をしたのだ。わしどもは乞食なのだ、そして乞
食でなければよかつたのだ。わしどもは自分の職業を捨て、自分の身の破滅を招
いたのだ。わしはもう此恐怖おそれを我慢して押へてはゐられない。此恐怖おそれは馳け廻
り叫び廻るだらう、滅亡する市まちの中から馳け出した犬のやうに、わしの中から
馳け出して叫び廻るだらう。わしのこの恐怖おそれは災を見た、そして悪いことが来
るのを知つてゐる。

スラツグ。(しやがれた聲で) 親方!

アグマア。(立ち上がり) 早く、早く!

(一同耳をすます。誰も口をきかない。石のやうな靴音が進んで来る。後方右手の戸より顔も手も一様
に綠色なる七人の綠人の一隊一縦列をなして進み来る。

綠岩の靴をはき、兩膝を非常にひろく離して歩いて来る、數百年間あぐらをかいて坐してゐた爲である。
右の手と右の人差指は上の方へ指して、右の肘を左の手に押へて、奇妙な様子に屈んでゐる。舞臺半分
どころまでやつて来るさぐるりさ左に向き變へる、それから恐怖の状態にある乞食等の前を過ぎ、六人
だけは前述の姿勢で見物にうしろを向けて坐る、一同の中の首領である一人は屈みながらやつぱり立つ
てゐる。)

オーグノ。(綠人がちやうど左に轉じた時、さげぶ) 山の神様!

アグマア。(しやがれた聲で) 黙つてろ! 彼等は光あかりで眼がくらんでゐる。俺たちを見
つけないかも知れぬ。

(首領の緑人ひきさし指で提灯を指す——灯は緑色に變る。六人が坐し終つた時、首領は人差指を突出して七人の乞食の一人一人に指さす。その時乞食等は一人一人自分の神座に戻つて足を組合せる、恐ろしさうに一人一人の瞳が凝視する。この姿勢で乞食等はじいつとしてゐる、緑色の光が彼等の顔を照らす。神々は立ち去る。

間もなく市民等入り来る、或者は食物果物を持つてゐる、或者が一人の乞食の腕に觸り又別の乞食の腕に觸る)

一人。つめたい！石になつてしまつた！

(一同床に額をすりつけて平伏する)

一人。我々は疑つてゐた。我々は疑つてゐた。我々が疑つた爲に、石になつておしまひなすつた。

他の一人。まことの神だつたのだ。

一同。まことの神だつたのだ。

(幕)

アルギメネス王

アルギメネス王

(二幕)

人

アルギメネス王

ザアプ、 奴隸の子

老奴隸

若き奴隸

奴隸たち

ダルニアツク王

監督

豫言者

ダルニアツク王の奴隸

偶像の衛兵

王の犬の僕

妃アサリヤ

妃オクザラ

妃カワフラ

妃スラゴリンド

ダルニアツク王の妃たち

王の従者等奴隷の番兵等

時

大むかし

第一幕

ダルニアツク王の奴隷共の仕事してゐる畑の食事時間。アルギメネス王はぼろぼろの衣服を着け、垢つきよごれて、うつむいて地に坐し、骨をしゃぶつてゐる。髪はきたならしく伸びて髭もむちやくちやに亂れてゐる。使ひ耗らした鍬が側にある。二三人の奴隷たちは舞臺の後方に坐して生のキャベツの葉を食べてゐる。泣き唄といふ奴隷の唄の聲單調に悲しく、時々遠くの仕事場より聞え来る。

アルギメネス王。こりやよい骨だ。汁^{つゆ}けがある。

ザアブ。アルギメネス、俺はお前がうらやましい。

アルギメネス王。もう美むな。俺は此骨をすつかりしやぶつてしまつた。

ザアブ。お前が王様だつたから、それでお前が羨ましいといふのだ。人間がお前の足下に平伏したことがある。お前は馬に乗つて王冠をかぶつて陛下と呼ばれたことがある。

アルギメネス王

アルギメネス王。俺が王であつたことがあると思ひ出すと、たまらなく恐ろしい。
 ザアブ。だがお前、さういふことを思ひ出すことが出来るのは仕合せだ。俺なん
 ぞ思ひ出したくつても思ひ出すものがない——一度俺は一年間鞭打たれずに済
 んだことがある。打たれずに済ました俺の手腕てきわを思ひ出す——俺はそれよりほ
 かに何も思ひ出すことはない。

アルギメネス王。王であつたといふことは怖ろしいことだ。

ザアブ。だが俺たち過去になんにも好いおもひをしたことがない者はかはいさう
 なものさ。俺たちが未来きまいの事で希望を持つことはむづかしいからな。

アルギメネス王。お前たちは神があるか？

ザアブ。俺たちに神があつたら、其神が俺たちに勇氣をつけてくれて俺たちは兵
 隊を殺すかも知れない。其神が奇蹟を行つて俺たちに劍を授けてくれるかも知
 れない。だから俺たちは神を持つことを許されないのだ。

アルギメネス王。それぢやお前たちはなんにも希望はないのだな？

ザアブ。ところで俺はちよいとした希望があるのだ。いゝかい、これは内密の話
 だが——王様のあの大きな犬が大病で死ぬかも知れないといふのだ。死んだら
 其骸からだを俺たちに投げてくれるだらう。さうすればすてきな骨にありつける。

アルギメネス王。うん！ 骨か？

ザアブ。さうだ。それが此俺の希望だ。お前はほかにのぞみはないか？ お前の
 國民が何時か一度兵を起してお前を救ひ出し、あの王様を追つ拂つて、御所の
 門の前に指を縛つてつる下げてやりたいと思はないか？

アルギメネス王。いや。俺は何も望はない。敵が俺の國を襲つて眠つてゐた俺
 を捕虜にしたあの日に俺の神は神殿みやの中で倒されて三つに碎かれてしまつたの
 だ。だが、あの犬を俺たちにくれるだらうか？ 王の犬といふ高貴な身分の動
 物を俺たちにくれるだらうか？

ザアブ。死んでしまへば身分も何もあるものか。王様だつて死んでしまへば蛆虫に食はれるんだ。だから王様の犬を俺たちにくれないといふわけはない。

アルギメネス王。俺たちは蛆ではない！

ザアブ。分からないかい、アルギメネス。蛆は小さくつて自由の身だ。ところで我々は大きくつて奴隷の身分だ。だから俺たちが蛆だといつたのではない。ただ俺たちは蛆虫みたやうなものだといふのだ。それで蛆が死んだ王様を食ふのなら、なにも俺たちが――

アルギメネス王。もつと王の犬の話をかかせてくれ。そいつにや大きい骨があるか？

ザアブ。あるとも、大きな犬だから――背の高い大きい、まっ黒な奴だ。

アルギメネス王。ぢやあお前その犬を知つてるんだな？

ザアブ。うん、知つてるとも、よく知つてる。あの犬のおかげで俺はひつばた

かれたことがある、二人の奴から、三重の鞭で二十五遍ひつばたかれた。

アルギメネス王。どうして王の犬のためにお前が打たれたのだ？

ザアブ。俺が犬に敬禮しないで口をきいたといつて俺を鞭打つた。犬は俺たちの仕事場の方へたつた一人で驅けて来た、俺がそれに口をきいたのさ。人なつこい大きな犬だつた、俺はそいつに話しかけてそいつの頭を撫でてやつて、お辭儀をしなかつたのだ。

アルギメネス王。お前がさうやつてるところを見つかつたのか？

ザアブ。うん、番兵が俺を見てゐやつた。みんなでやつて来て直ぐ俺をとつ捕へて手を縛つちやつた。大きな犬のやつ俺にもつと話をしかけて貰ひたがつてゐたが、俺は大いそぎで引つばられて行つた。

アルギメネス王。敬禮すればよかつたのになあ。

ザアブ。犬がひどく人なつこく友達らしく思はれたので、王の大切な犬だつて

ことを俺は忘れちまつたのだ。

アルギメネス王。もつと聞かせてくれ。犬は怪我がい。それとも病氣かい？

ザアブ。病氣だといふはなしだ。

アルギメネス王。やれやれ、さうすると、直き死んでくれなければ瘠せてしまふだらう。怪我だとよかつたのだがなあ！——だが俺たちは愚痴をいつてはならない。俺はお前よりもよほど餘計に愚痴をいふ、それは俺が若い時分から服従といふことを學ばなかつた爲だ。

ザアブ。もしお前が昔の好い記憶を思ひ出して樂しむことが出来ないのなら、もつと何か望むがい。俺がお前のやうに好い記憶を持つて居れば、のぞみなんぞはなくともよいがな。希望を持つのは實にむづかしいことだ。

アルギメネス王。王の犬を食つてしまつたら、もうそのあとに何も希望はなくなるのだ。

ザアブ。なあにお前、地べたを堀りつ返してゐるうちにや金でも見つけ出すかも知れない。さうしたら、その金で番兵のかしらに鼻ぐすりを使つて、かしらの刀を貸して貰うがい。お前が刀を持つてゐれば、俺たちはみんなお前に従ふ。さうすりや俺たちで王様をつかまへて縛つて地べたに寝かして、茨のとげで王様の舌を口の外にひつぱり出して置いて、それに蜜をなすりつける、それから其近邊にも蜜をふりまいて置く。さうすると大きな蟻があの大きな山から出て来るだらう。俺のおやぢは地を堀つてゐて金をめつけ出したことがある。

アルギメネス王。(鋭く) お前のおやぢは自由の身になつたか？

ザアブ。いゝや。おやぢが金を眺めてゐるところを王様の監督が見つけておやぢを殺してしまつた。もし番兵に賄賂をやる暇があれば、自由な身になれたのだつたらうが。

(一人の豫言者が二人の番兵に守られて舞臺を通り過ぎる)

奴隷等。あの人は王様のところへ行くのだ。王様のところへ行くのだ。
ザアブ。王様のところへ行くのだ。

アルギメネス王。王のところへ行つて善いことを豫言するのだらう。善いことを
王に豫言して、善いことが起つた時に報酬を貰ふのは樂なはなしだ。王にはよ
いことでなくて何が来るものか？ 豫言者！ 豫言者！

(深い響きの鐘がゆつくりと鳴る。アルギメネス王及びザアブは直ぐに鉄を取り上げる。舞臺後方に
ある老いたる奴隷共は直ちに膝をついて自分等の手を以て土を掘り始める。働いてゐる一番の老年者
の白い髭が泥の中にひきすれる。アルギメネスは土を掘つてゐる)

アルギメネス王。俺たちがいつも唄ふあの唄は何といふ唄だ？ 俺はあの唄が好
きだ。

ザアブ。名はないよ。あれは俺たちの唄だ。俺たちはほかの唄は知らない。

アルギメネス王。むかし世間にはほかの唄もあつた。名はないのか？

ザアブ。兵隊共はあの唄に名をつけてるやうだ。

アルギメネス王。兵隊共は何といつてゐる？

ザアブ。兵隊どもはあの唄を「泣き唄」「奴隷の唄」といつてゐる。

アルギメネス王。好い唄だ。俺はもうほかの唄はうたへなくなつた。

(ザアブは地を掘り返しながら次第に遠ざかり行く)

アルギメネス王。(鉄が土中の何物かにカチリとあたる、獨り言をいふ)かな物らしい！(鉄を以
て再び探つて見る)金かも知れない！——こんな處にあつても仕方がない。(ゆつ

くりと土を掘り返す。急に彼は膝をついて興奮したやうに両手で土を掘り起す。それから極くゆつ々
り、膝をついた儘で、長い緑色がかつた刀を両手に載せて、じいつと見つめながら持上げる。仰向いた
彼の額のあたりまで其刀を持つて行く、両手に平に横たへた儘で、そして其刀に對していふ)あゝ聖
い尊いもの！(それから彼は両手を膝の上まで持つて来る、そして尙も目を離さず刀を見ながら)
あしたで丁度まる三年になる、ダルニアック王は俺の國を奪ひ取つて、俺につ

ばをかけた。その年には三度鞭打られた。十二鞭、十七鞭、それから十二鞭と此十五夜で一年と十一ヶ月になる。監督は俺の顔を打つた、そして其年には九度俺のことを犬だといつた。ひと月と十五日、俺は終日牛に結びつけられて丸石を道路の上に引つぱつて歩いた、食事時間のほかに息みもしなかつた。其年には二度打られた——十八鞭とそれから十鞭と。今年ことしは奴隷小屋の屋根が墜ちた。それでもダルニアック王は直してはくれない。五週間前に王の妃の一人が奴隷の仕事場を通りながら俺を見て笑つた。俺は今年も十三鞭打られた。十二たび俺のことを犬だといつた。斯ういふことを彼等は王たる俺に、イサラの家の王たる俺に對してしたのだ。(彼は暫時注意深く耳をすましてゐる、それから刀を再び埋める、其上に土をかけて両手でたたく、それから再び前の如く地を掘り返す)

(老いたる奴隷等は彼を見てゐない。彼等の顔は地に向いてゐる。王の監督者は鞭を手にしてやつて來る。監督が舞臺を通り過ぎる時、奴隷たちもアルギメネス王も地に跪く。監督は立ち去る)

アルギメネス王。(兩手を下の方に擴げて跪きながら) あゝ勇者の魂、お前は今どこをさまよつてゐるか、お前の神はどういふ神か、其神はお前を罰してゐるかお前を守つてゐるかわしは知らぬが、あゝ王者の靈よ、むかし此刀を此處に横たへたお前にわしは祈る、わしには祈るべき神がない、わしの國の神は夜の間に三つに碎かれてしまつた。わしの腕は三年間の奴隷の苦役に固くなつて刀を持つことを忘れてゐる。わしが六人の人を殺して血氣の奴隷共に武器を持たせることが出来るやう、お前の刀を導いてくれ。さうすればわしはお前に毎年百疋の牡牛の祭物を捧げる。わしはイサラの國にお前のために神殿みやを建て、其神殿みやに行く凡ての者にお前を思ひ出させる。お前は死者の中にも尊まれ妬まれる者となるであらう、死者は忘れられることを悲しむものだ。よし又お前が不正に人の生命を奪つた盜賊であつたにせよ、お前の神殿には珍らしい香をたき、若い娘たちは讚歌をうたひ、新しく摘んだ花はおごそかな廊を飾り、僧たちは鐘を

鳴らしてお前の後世を祈るであらう。あゝ、此古い青さびの刀は好い身を持つてゐる。賢人の教へる如く死者も物を見ることが出来るならば、お前は此切尖があてをはずすのを見ることはいやであらう。お前の此刀が空しく空に振られるのを見ることはいやであらう。これほどな大きな刀は打込む骨髄を見出さずば止まぬ。(右の手を高く上げて)あゝ、むかしの人の靈、此右の手にやどつてくれ、あゝ名を知らない勇者の魂！もし又お前が如何なる神にか物いふことが出来るなら、ダルニアック王の神イルリエルの滅びるために祈つてくれ。(立上がつて再び掘り始める)

監督。(再び入場)お前は祈つてゐたな。

アルギメネス王。(跪いて)いゝえ、閣下、祈りは致しません。

監督。番兵がお前を見てゐた。(アルギメネスを打つ)奴隷が神に祈ることは許されな
ら。

アルギメネス王。わたくしはイルリエルに祈りました、どうか私を善良なる奴隷として下さるやうに、わたくしが土を掘り丸石を引くのが上手になりますやうに、そして食事が不足な時にも死なずに、我が主大王のために善良なる奴隷であることが出来ますやうに、祈りました。

監督。イルリエルに祈るとは身の程知らずだ。畜生が永遠の神に祈ることは許されない。(立ち去る)

(ザアアは掘りながら以前の場所に戻つて来る)

アルギメネス王。(掘りながら)ザアア!

ザアア。(掘つてゐる)口をきゝながら俺の方を見ちやあいけない。番兵の奴らが俺たちを見張つてる。堀つてる手許を見るがいゝ。

アルギメネス王。俺たちが顔を見合せると、口をきいてるつてことがどうして番兵に分かるだらう?

ザアブ。お前は分かりが悪いねえ。そりや勿論分かるとも、

アルギメネス王。ザアブ！

ザアブ。なんだい？

アルギメネス王。番兵は今見えてるだけで幾人だ？

ザアブ。あすこに六人ゐる。俺たちを見てゐる。

アルギメネス王。あの六人の番兵を見てゐるほかの番兵がゐるだらうか？

ザアブ。そんなものはゐない。

アルギメネス王。どうしてゐないことが分かる？

ザアブ。そりや彼奴等あいつらのかしらがないとなると、地面に坐つて賭博を始めるからな。

アルギメネス王。どうしてそれで彼奴等を見てゐるほかの六人の者がゐないといふことが分かる？

ザアブ。随分わかりが悪いねえ、勿論、そりやほかにはゐないといふことが分かる。

たとへばだ、もし別にゐるとしたら、ほかのかしらが見つければあな、さうすりや奴等の指は切り落されちまふ。

アルギメネス王。なるほど！ (暫時してから) ザアブ！ (又暫らくして) もし俺が番兵を殺さうとしたら、奴隷たちは俺に従ふだらうか？

ザアブ。だめだよ、アルギメネス。

アルギメネス王。なぜ俺に従はないだらう？

ザアブ。お前は奴隷と見えるからな。あいつらは自分が奴隷で、奴隷がどれほど卑しいものであるかを知つてゐるから、奴隷には従はない。お前が王様らしく見えれば、きつとお前に従ふ。

アルギメネス王。併し俺は王だ。俺が王だといふことを彼奴等も知つてゐる。ザアブ。王様らしく見えなくつちや駄目だ。見かけだけで彼奴等あいつらは従ふのだ。

アルギメネス王。もし俺が刀を持つてゐたら従ふだらうか？ 青銅の美しい大きな刀を持つてゐたら？

ザアブ。俺もそんなことが考へつけばよいがなあ。お前がひかし王様だつたことがあつたら、青銅の刀なんてことを思ひつくんだね。俺も一度どうかして番兵の奴らと戦ふ機会が来るやうにのぞみを持つて見ようとした。だが、俺は刀を思ひつくことが出来なかつた。想像することも出来ないんだ。俺は只鞭よりほかに考へられない。

アルギメネス王。ザアブ、もちつと側に寄つてくれ。(二人少しづつ、近く寄る) 俺は地面の中からひどく古い刀を見つけ出した。普通の兵卒の持つてるやうな刀ぢやない。王の、怒つてゐる王の、持つてゐた刀であつたらう。其刀は恐ろしい仕事をしたかも知れない、小さい痕が澤山ついてる。恐らくむかし此處に戦があつて、凡てが殺されたのかも知れない、そして其王が最後に死んで、此處に刀

を葬つたのだらう、そして大きな鳥が来てその王を呑んでしまつたのかも知れない。

ザアブ。アルギメネス、お前は王様の犬のことをあんまり考へ過ぎたんだ、それで腹が減つたんだ、腹が減つた爲に氣がふれたんだらう。

アルギメネス王。俺はほんとにさういふ刀を見つけ出したのだ。(間)

ザアブ。さうか——そんならお前は又紫の服を着て玉座に座るさ。そして勢の好い馬に乗るんだ。俺たちはお前のことを陛下と呼ぶことになるだらう。

アルギメネス王。俺は先づ手始めに腹がくちくなるまで食ふ。それから水をどつさり飲む、そして眠る。だが、奴隷たちは俺に従ふだらうか？

ザアブ。お前が刀を持つてゐれば、あいつ等はいやでも従ふことになる。併しイハリエルは力のある神様だ。人の話に聞いたんだが、イルリエルが無事な内はダルニアック王に敵する者はないんださうだ。ある時敵があつて、イルリエル

を河へ投げ込んで此王の家を倒したものがあつたが、漁師がイルリエルを見つけて出して又前どほり祭つた。さうすると、敵は忽ち追ひ拂はれて王の家が再び起つたのださうだ。

アルギメネス王。もし俺の神が滅されたやうにイルリエルが滅されれば、ダルニアック王もちやうど俺が眠つてゐて破られたやうに破られるだらうか？

ザアブ。イルリエルが倒されれば、人民はみんな泣いて逃げるだらう。それは恐ろしい前兆になるのだ。

アルギメネス王。王宮の武器庫には人が幾人ゐる？

ザアブ。番兵が外に出てゐる時には、武器庫には十人ゐる。

(兩人無言で掘つてゐる)

ザアブ。番兵のかしらは何處へか往つてしまつた——彼奴らは又賭博をやつてゐる。(鉄を投げ出して兩手をのばす) 髭の男が又勝つた、あいつは指先がはしつこいな。

——また始めた、もうそろそろ暗くなつて来て、俺にははつきり分からない。

(アルギメネス竊かに刀を取り出し、取り上げて手に握る)

ザアブ。陛下！

(アルギメネス這ふやうに屈んで番兵の方へ忍び行く)

x x x x x

ザアブ。(他の奴隷等に) アルギメネスは恐ろしい刀を見つけ出して番兵を殺しに行つた、それがありきたりの刀ではないのだ、王様だつた人の刀に違ひない。

老いたる奴隷。アルギメネスはそんな真似をすると、ひどくむち打たれるだらう。俺たちは夜どほしあれの泣き聲を聞かされるんだ。其なき聲でおびえて俺たちは眠れないだらう。

ザアブ。いやいや！ 番兵はみぢめな奴隷の奴らを打つのだ、アルギメネスは怖い顔をしてゐた。あの怖い顔を見てあの恐ろしい刀を見れば、番兵共は恐れ入

つてしまふ。大きな刀だった、そしてあの男は怒つた顔をしてゐた。今に俺たちに番兵の奴らの刀を持つて来てくれるだらう。俺たちはあの男の前に平伏して足に接吻しなければ、あの男は俺たちにも怒るだらう。

老奴隸。アルギメネスは俺にも刀をくれるだらうか？

ザアブ。もしあの男が番兵を殺せば俺たち六人に一つづゝ刀をくれる。さうだ、お前にもくれるだらう。

他の奴隸。刀！ いやいや、俺はいやだ。俺が刀を持つてると分れば、王様は俺を殺してしまふ。

他の奴隸。(二つの考を思ひ付いたやうに、ゆつくりいふ)もし俺が刀を持つてることを王様が見つけ出したら、王様には悪い日だらうよ。

(一同左手の方を遠く見る)

ザアブ。又あいつ等はばくちを始めやがった。

始めの奴隸。俺にはアルギメネスが見えない。

ザアブ。なあに、あの男は屈んで歩いて行つた。番兵はちやうど地平線のところにゐる。

第二の奴隸。番兵の後の黒い影はなんだらう？

ザアブ。アルギメネスにしてはちつとも動かないぢやないか。

第二の奴隸。見ろ！ 動いてる。

ザアブ。ひどく暗くなつて来て、俺には見えない。

(一同は迫り来る闇を透してなほも見えてゐる。彼等は膝を立てて、頸を長くのばしてゐる。誰も無言でゐる。暫らくして彼等の口からも最つと離れた所にある人々の口からも長い深い「ああ！」といふ聲が出る。恰かも馬が障礙物で倒れた時に馬見所で起る聲のやうな聲だ)

(幕)

第二幕

七八

ダルニアツク王の御座の間。王は舞臺後方の中央にある玉座に坐してゐる。王より少し左に寄り、安座したかたちの暗緑色の偶像が壁際に飾り立て、ある。王の妃たちは王の周囲の床に坐してゐる、二人は王の右に二人は王と偶像との間にゐる。みんな冠を被つてゐる。暗緑色の偶像の側には槍を持った兵士が一人、片膝をついて跪いてゐる。奴隸の唄なる「泣き唄」が奴隸の働いてゐる野の方からかすかに聞こえる。

第一の妃 陛下、あたらしい豫言者を見せて下さいませんか。また別の豫言者を見るのはたのしみでございますわ。

王 うん、よろしい。

(王は銅羅を鳴らす、従者入場、王の側を通り過ぎて偶像の前に行き禮拜する、それから舞臺中央に戻つて王の前に一禮する)

王 新規の豫言者を此處へ連れて来てくれ。

(従者退場。王の監督、書類の巻きたるものを手にして入場。王の側を過ぎて、偶像に一禮して王の前に戻り、跪く、そして首を下げた儘で何時までも跪いてゐる。)

王 (其間も自分のすぐ右に座してゐる第二の妃に談しかけてゐる) アサリヤ、わしは廣い庭園の端の方にお前のために美しい亭を拵へさせてゐる。其處にはお前の好きな菖蒲や水の側で育つやうなものをいろいろ植ゑさせる。其處に造る流れはお前の國の流れのやうに細いうねつた流れにする。わしは新しい工夫で山から水を持つて來させる。(王から一番遠い右手の妃オクザラに向つて) オクザラ、お前にも好いものを拵へてやる。わしはお前の爲めに山から岩を持つて來させる、わしのなまけ者の奴隸どもに小さい山を造らせて山の草を植ゑさせる。そしてお前は冬になると其處へ行つて腰かけてお前の故郷の北國を思ひ出すがよい。(跪いてゐる監督に) あゝ、何か用かな?

監督 陛下、庭園おにはの設計圖でございます。奴隸どもが五年のあひだ土を掘り返し

七九

路をならしましてございます。

王。(設計を手に取り) バビロンにも庭園があつたかな？

監督。どのやうな庭園か、ございましたらやうに承はつて居ります。

王。わしの庭園はそれよりは大きくしたいものだ。全世界に知らせ驚嘆させたいものだ。(設計の圖面を見る)

監督。御もつともでございます。

王。(設計圖に指さしながら) 此山はどうもいかん、すこし高過ぎる。

監督。はい。

王。退かしてしまへ。

監督。はい。

王。いつ頃庭園が出来あがつて、妃たちの散歩が出来るやうになるかな？

監督。陛下、只今の季節には青い物が少うございまして、仕事がかどりませんで、

で、奴隷共はなまけてまゐります。時折は増長いたしまして、骨を食はせてくれと申します。

妃カハフラ。(監督に向つて) そんならなぜ打つてやらないのです？ (妃スラゴリンド

に向つて) なんでもない話でございますのね、打ちさへすればようございますのに、此人たちはどうして時々こんなに分からないのでございませう。あたくしはお庭が歩きたいと思つてゐますのに、此人たちは、陛下、まだ出来になりません、なんぞと申すのでございますもの。まだ出来になりません、お庭が出来にならない理由でもあるやうでございますのね。

第四の妃。ほんとにさうでございます。困つた人たちでございますね。

(此言葉の間に王は設計圖を返す。監督は退場する。豫言者を引き連れて従者再び入場。豫言者は長い暗褐色の上着を着けてゐる。おごそかなる顔つき。長い黒い髭をはやし、髪の毛を長くしてゐる。先づ偶像に禮してから王の前に一禮して無言で立つ。従者は双方に禮をしてから戸口に立つ)

王。(其間も妃アサリヤに話しつゝける) 沼が氷る時分になつたら、うまく鴨を誘つて来てお前の川で泳がせよう。そしたらお前の國のやうに思はれるだらう。(豫言者に) わしどもに豫言してもらひたい。

豫言者。(すぐ大きな聲で語り始める) ひかし或る王がありました。其王は彼を憎み彼のために働く奴隷を持つてゐました。又、彼を守り彼のために死ぬべき兵士を持つてゐました。彼を憎み彼のために働く奴隷の数は彼を守り彼のために死ぬべき兵士の數よりも多數でありました。その王の御代は長くはなかつたのです。陛下よ、今あなたが使つておいでになるあなたを憎む奴隷の數は、あなたの兵士の數よりは多數であります。

妃カハフラ。(妃スラゴロンドに)——それであたくし、サファイヤと大きなエメラルドが中に這入つてる冠を被りましたのよ、あの外國の王子が御らんあそばして大へんあたくしが優しく見えるつておつしやいましたわ。

(王は此時まで妃アサリヤに笑顔を見せてゐたが、豫言者が語り止めるのを聞くこゝ、愛想よく首を下げて會釋する。妃たちは王が愛想よく會釋したのを見ると、無意味に手を拍つて豫言者を喝采する。)

第三の妃。陛下、あの人に何かもう一つ豫言をおさせあそばせな。おもしろうございませぬ。恰巧さうに見えますのね。

王。も一つ何か豫言して貰はう。

豫言者。陛下のお國の國境の山を守る兵士等は遠い平野に一人の敵の影をも見つけません。然るに、守備の兵士等が守りの固いさびしい國境に求めつゝある彼は、あなたの御門の中にかくれてゐます。或る事の前兆と恐怖がわたくしの心に来ました。今でもまだ時があります。まだ、今でも、まだ少しの時があります。あなたの王國のために憂ひてわたくしの心は暗うございます。

妃カハフラ。(妃スラゴロンドに)あの豫言者の髪具合が氣に入りませぬわ。妃スラゴロンド。短かく刈りさへすればようございませぬのに。

王。(ちよいと首で會釋して豫言者に眼をやる) 御苦勞であつた。大分おもしろかつた。

妃スラゴリンド。ほんとに惻巧でございますことね! どうしてあんな事を考へつくのでございませう?

妃カハフラ。ほんとに。ですけれどあたたくし、惻巧なのを惻巧ぶつてる人が憎らしうございますわ。あの髪の恰好を御らんあそばせ。

妃スラゴリンド。ほんとに、あれはたまりません。

妃カハフラ。あの人が惻巧さうなことを申しましたところで、髪の毛をほかの人たちのやうにしてゐても差支へないぢやございませんか。

妃スラゴリンド。さうでございますとも、わたくしはぶつてる人は大きらひでございませう。

(従者入場、偶像に一禮して、王の前に跪く)

従者。お客様方は、御宴の間に皆様おあつまりでございます。

(一同起立。妃たちは二人づゝ並び先づ御宴の間に進み行く)

妃アサリヤ。(妃オクザラに) あの豫言者は何の話をして居りましたの?

妃オクザラ。國境の兵隊のことを何とか申して居りましたよ。

妃アサリヤ。あら! それで思ひ出しましたわ、あの紫隊の若い士官のことを。

あの男がリヌウラを思つてゐるといふはなしでございますよ。

妃オクザラ。あゝ、シアルコスでございますせう? リヌウラが自分でそんな事をいひ出したのでございませう。

(妃たちは月口まで行き、其兩側に立止まる、それから二人づゝ向き合つて立つてゐる。王は玉座を下りて妃たちの向き合つてる中を通り過ぎて御宴の間に行く。王が通る時妃たちは體を風めて丁寧な禮をする。やがて妃たちも王の後へ行く、その次ぎに従者等が行く。貴族の唄である「酒唄」が聞えて、遠くに聞えた奴隸の唄を消してしまふ。偶像の衛兵だけはあさに居残り、今まで通りイルリエルの側に跪つてゐる)

偶像衛兵。あの豫言者のいつたことが氣になる——もしほんとだつたら大變なこ

とだ——もし嘘だつたら、やつぱり大變だ、あの男はイルリエルの名に依つて豫言したのだから——あゝ！ みんな酒唄をうたつてゐる。お妃たちもうたつておいでなさる。元氣なことだ！——俺も貴族になつてあの席に坐つてお妃たちを眺めてゐたい。(ひき込まれて一緒になつて其唄をうたひ出す)

哨兵の聲、衛兵、外へ出る。

(酒唄なほ續く)

權威ある聲、其衛兵を追出してしまへ！ ぐづぐづするな、豚の奴らめ！

(まだ酒唄が聞える。劍の打合ふらしいかすかな物音)

一人の叫聲、武器庫へ！ 武器庫へ！ 誰か助けてくれ！ 奴隷共が武器庫へ来た。あゝ！ まゐつた！

(間)

アルギメネス王。(月口に立つて) 奴隷たちの仕事場へ行つて、宮中の衛兵は死んで

しまつて、武器庫も我々の手に入つたといつてくれ。お前たちの中で十人だけ

仕事場から味方が来るまで武器庫を守つてゐろ。(武器を帯びたる奴隷共を連れて、御

座の間に入る) イルリエルを倒してしまへ。

偶像衛兵、俺の生命があるうちはこの神様に觸らせない。

奴隷、貴様の槍を欲しいのだ。

(一同彼に打ちかゝる。彼の劍を取り上げ兩手を縛る。一同でイルリエルを引倒す。暗緑色の偶像は七つに碎ける)

アルギメネス王、イルリエルは倒れてこなごなに碎けた。

ザアブ。(少し怖ろしさうに) 死なゝい筈の神が死んでしまつた。

アルギメネス王、俺の神は三つに碎けたが、イルリエルは七つに碎けた。ダルニ

アツクの運命ももう俺には勝てぬ。(奴隷の一人が玉座から黄金の肘かけを碎き取る) さあ

奴隷たち一同に武器を持たせよう。(退場)

ダルニアック王（大勢の供を連れて入場）玉座は碎けた。イルリエルはわしに叛いた。供の一人、イルリエルが倒れた。

一同。（ダルニアック王と共に）イルリエルが倒れた、倒れた。（或る者は槍を捨てる）

ダルニアック王。（偶像の衛兵に）どういふ妬みの神か、それとも神を恐れぬ人間がこんなことをしたのか？

偶像衛兵。イルリエルが倒れた。

ダルニアック王。誰か人が此處へ這入つて來たか！

偶像衛兵。倒れた。

ダルニアック王。どちらの方へ往つた？

偶像衛兵。イルリエルが倒れた。

ダルニアック王。其奴等^{そのやつら}をイルリエルの前で責めてやらう。彼等の眼を糸につらぬいてイルリエルの頸に掛けてイルリエルに見せてやる、彼等の骨の上に再び

イルリエルを祭らなければならぬ。

（槍を捨てた人々は再び拾ひ上げる、其槍を地に引きすり行く。一同力なく従ふ。）

歎く聲。（次第に遠ざかり行く）イルリエルが倒れた。イルリエルが倒れた。イルリエル、イルリエル、イルリエル。倒れた。倒れた。（奴隸の唄不意に止む。やがて仕事場にある奴隸共の聲にて大聲に和す）イルリエルは倒れた、倒れた、倒れた。イルリエルは倒れた、碎けた。イルリエルは倒れた、倒れた、倒れた。

（戦ひの物音聞える。刀の打合ふ響き、人の聲、時々イルリエルの名も聞える）

偶像衛兵。（イルリエルの破片に風み跳く）イルリエルは碎けた。彼等はイルリエルを滅した。彼等は星の歩みに大なる邪魔をした。月はとこやみに變り、空より墮ちて夜を見捨て去るかも知れぬ。太陽は再び此世を照らすまい。あの人たちは如何に此世界を破壊したか知らないである。

（アルギメネス王及び彼の手の者一同再び入場）

アルギメネス王。(月口に立つて) お前はイサラの國へ行つて、わしが自由の身になつたと傳へてくれ。それから、お前は國境の兵士の許へ使に行つてくれ。彼等は死を選ぶか、それとも、わしに従つて、先王の玉座の右の手を溶かして一同の中に分けるか、あれらに選ばせてやれ。(劍を持ちたる奴隸共は玉座の下に行き其兩側に立ち、王にいふ「陛下あなたのお位におつきなされまし」アルギメネス王は見物の方に顔を向けて立ち、刀を兩手に載せて、ゆつくりと自分の頭の上ぐらゐまで捧げる、其刀を見ながら、いひ續ける) 名を知らない勇士と、其勇士の守り神たちに感謝する。(王は王位に即く。ザアアは玉座の下に平伏する。幕が下りるまで平伏した儘で、時々「陛下」とつぶやくばかりである。一人の武裝したる奴隸は先王の監督を引ずつて入場する。アルギメネス王は怖い顔をして監督を見つめる。監督は玉座の前に引き寄せられる。前の設計圖をまだ持つたまゝである。暫時の間アルギメネス王は口をきかない。暫らくしてから、巻物を指さして) お前が持つてるのは何だ?

監督。(跪いて) 陛下、これは大庭園の設計圖にございます。世界の不思議となるへま答でござりました。(紙をひらく)

アルギメネス王。(にがにがしく) 三年の間俺が土を掘り返したところを見せてくれ。(監督は震へる手で王に指し示す、巻物がぶるぶる震へるのが見える) 其場所へ、名を知らない勇士の神殿を建てよう。そして其祭壇に此劍を永久に納める。その勇士の亡魂が夜る夜るさまよひ出ても——もし人間が墓を越えてあの世から夜毎にさまよひ來るものとすれば——その人の魂は自分の刀を再び見ることが出來よう。奴隸たちも壓制されてゐる者もみな其神殿に祈るがよい。併し、貴族も權勢ある者も其神殿をおろそかにしてはならぬ、無名の勇者は厚く祭らなければならぬ。

(タルニアツク王の家人、驅けて入場する。その男アルギメネス王を見て驚き自失して王を見つめる)

アルギメネス王。お前は何だ?

男。わたくしは王様のお犬の家來でございます。

アルギメネス王。何しに此處へ來た？

男。王様のお犬は死なれました。

アルギメネス王と奴隸等。(我を忘れて、ひもじさうに)骨は？

アルギメネス王。(不意に今までの出來事と自分の立ち場を思ひ出す)先王と共に葬つてやる
がよろしい。

ザアブ。(諫める聲にて)陛下！

(幕)

光
の
門

光の門

(二幕)

人

ジム 在世中はどろぼう
ビル 同じく どろぼう
二人とも亡者

處

寂しき地

時

現代

「寂しき地」——大きな黒い岩石と口のぬけたビル場が散らかつてゐる、ビル場は非常に多数に

散らかつてゐる。後方、大きい平らな花崗岩の壁がある。その壁に天の門がついてゐる。門の扉は黄金。その「寂しき地」の向うは無限の深淵があつて星がぶらさがつてゐる。

幕があく、ジムがつまらなさにビイル場の口をあけてゐるころ。それから、彼は非常に注意ぶかくゆつくりと其場を振つて見る。その場は空虚だと分かる。かすかな不愉快な笑聲が遠くに聞こえる。この笑聲とそれに連れる伴奏は閉幕までくり返し續く。くちのあかない場は岩石の後に澤山ある。その上になほ澤山の場が空中からジムの手の届く邊に絶えず落ちて来る。どれもこれも空虚である。ジムはなほ數本の場をあけて見る。

ジム。(注意深く一本の場の重さを見る) こいつあ、はいつてゐる。

(あけて見ると、これも他の場と同じく空虚である)

(左手に唄の聲がこえる)

ビル。(眼の上に彈丸の痕がある、左手より入場、うたひながら来る) Rule Britannia, Britannia

Rule the waves (急に唄を止めて) やあ、ばんざい。ビイルがある。(取り上げて見る)

空虚と分かる。遠くの方を見たり下の方を見たりする) おれは最う此お星様だの岩の路にも厭きて来た。始めからしまひまで此場の側ばかり歩いてるんだからな。あの家の主人が俺を射殺してからもう二十四時間も立つだらう。なにもあいつが俺を殺さなくつたつて好かつたのだ、なにもあいつに怪我をさせようともどうとも思つちやゐなかつた、たゞすこし銀貨が入用だつたんだ。變な氣持がしたつけな、あの時は。やあ、門がある。なあんだ、これが天の門か。なるほど。ふん、こいつはいゝあんばいだぞ。(暫時上の方を見上げてゐる) いやあ、俺には此場はのぼれない。てつべんがないんだな。何處まで行つても切りなしに高いや。(門の扉を叩いて待つ)

ジム。そこは俺たちの行くところぢやねえんだよ。

ビル。やあ、此處にも人間がある。絞殺されたんだと見える。おやつ、ジムあにいちやねえか! ジム!

ジム。(つまらなさうに) やあ!

ビル。ジムだ! 何時から此處へ来た?

ジム。俺はそもその始めから此處にゐる。

ビル。おい、ジム、俺をわすれたかい? なあ、ひかしひかし此ビルが小さい時分に、お前が此おれに錠まへ切りを教へてくれたんぢやねえか、お前がゐなかつたら、おらあ何一つ商賣も知らず、一文の錢ぜにもかせぐことは出来ず、一文なしでゐたらうになあ。(ジムぼんやりビルを見てゐる) ジム、俺はお前を忘れたことはないぜ。おらあ方々の家へ押し込んだ。それから大きい家へも這入り始めた。市外へ出るとな、實際大きな家があるからな、俺も金が出来て、知り合ひの間から立てられるやうになつた。おれは一人前の市民シチズンになつて、市の真中にくらしてゐた。夜、火の側に腰かけてゐる時なんぞ、俺はいつでも考へた、俺はジムに負けない腕うでさだと。だが、ジム、ほんとのところ、俺はとてもお前に

はおつつけなかつた。俺はお前のやうに高い處へ上ぼることは出来なかつたし、お前のやうにみしみしする梯子段を歩くことも出来なかつた、四邊あたりがしいんとしてゐて、家に犬がゐたり、がらがら音のする物がそこいら中に散らばしてあつたり、一寸觸つてもいやな音のする戸があつたり、ちつとも知らなかつた病人が二階に寝てゐやがつたり、そいつが眠れないで所在なしにこちとらの爲に耳をすましてゐると來られちや、やり切れないや、お前、ほんとにビル小僧を覚えてゐないのか?

ジム。そりや何處かよその土地の話だろ。

ビル。うん、さうだ、下の世界であつたことさ。

ジム。だが、此處は此處よりほかに何處もないんだから。

ビル。ジム、俺の方ぢやお前を忘れたことはなかつた。俺はね、お寺でほかの連中と一緒になつて、ごしやごしや云つてる時でも、しよつちうお前の事を考へ

出してゐた、あのバットニーの小さい部屋で、ひとりの奴が片手に拳銃を持つて片手に灯あかりを持つて、隅から隅までお前を探し歩いてると、お前はお前で其奴と殆ど一緒になつて歩き廻つてゐたことなんぞ思ひ出してゐたんだ。

ジム。バットニーと云ふのはなんだ？

ビル。あい、ジム、ほんとに思ひ出せないのか？ お前があれに商賣を教へてくれたあの日の事を思ひ出せないか？ 俺は十二だつた、ちやうど春で、町の外は五月の花ざかりだつた。俺たちは新町しんまちの二十五番地の家を荒した。その翌日その家の主人の肥つた馬鹿馬鹿しい顔を見たつ。もう三十年もむかしだ。

ジム。年ねんといふのは何のことだ？

ビル。これは、ジム！

ジム。なにしろ此處では何一つ希望のぞみといふものがないんだ。何一つ希望のぞみがなければ、未來といふものもない。未來がなければ、過去もない。此處は現在ばか

しのところだ。まつたく俺たちは上がつたりだ。年ねんなんてものは此處にはない。なんにも、なんにも、ないのだ。

ビル。元氣を出せよ、ジム。お前は「なんぢら此處に入る者は凡ての希望のぞみを捨てよ」といふ句を思ひ出してるんだね。俺も句を覚えようとしたことがあつたつ。句はしやれてるからな。シエークスビヤとかいふ奴が作つたものだよ。だが、あんなものは馬鹿らしいね。何しろお前、お前といふところを汝と云つたつて、何になる？ 句なんぞ考へなさんな。

ジム。此處には希望のぞみはないと云つてるんだ。

ビル。元氣を出せよ。希望のぞみは澤山ある、あるだらうぢやないか？ (天の門を指さす) ジム。うん、だからあんなにしつかり閉め切つて置くんだ。俺たちに少しでも希望を持たせまいといふ寸法だ。さうだ、俺もお前の話でそろそろ地のことを思ひ出して來た。地でも此處とあんなじだつた。澤山持つてる奴は、持つてれば

持つてるほど、人にくれまいとしたつけな。

ビル。お前も、俺が何を持つてるか聞いたら、すこしは元氣が出るだろ。ねえ、ジム、ビールがあるか？ やあ、ビールがあるぢやないか？ なあんだ、これぢや元氣を出したつていゝわけだがな。

ジム。いくらビールが見たくつても、これよりほかには見られめえ。みんな空虛からつぽなのさ。

ビル。(腰かけてゐた岩の上から少し身を起して、立ちながらジムの方を指し、元氣よく)これさ、此處には希望のぞみなんてものはないと云つてゐたのはお前だらう。そのお前が一本一本に塚をあけちやビールにあたらうといふ希望のぞみを持つてるんぢやねえか。

ジム。うん、俺もいつか一度は一滴ひとつたらしでもビールが欲しいと思つてゐるんだ。だが駄目だといふことは俺も知つてる。あいつらの悪戯いたづらも一遍ぐらゐははづれさうなものだが。

ビル。どのくれを開けて見た？

ジム。さあ、俺にも分からねえ。なんでも、しよつちうやつてるんだ、ぐんぐんやつつけてる、——何時からだつつけ——何時からつと——(考深く頭を撫でた手を耳の方まで持つて行く)うん、やつぱり、始めつからさ。

ビル。なぜ止めにしねえ？

ジム。のどが渴いてたまらねえんだ。

ビル。ジム、この俺が何を持つてるか、お前知つてるか？

ジム。知らねえ。何が何だつて、役にや立たねえ。

ビル。(また新しい塚が空虚くうそと分かる)ジム、あの笑つてる奴は誰だい？

ジム。(此間に驚いたらしく、聲たかく力を入れて)笑つてる奴？

ビル。(自分の問ひかけた事が馬鹿げてゐたのかと、少してれ氣味で)ともだちか？

ジム。ともだち——(笑ふ)(これに連れて例の笑聲高く長く續く)

ビル。まあ、なんでもいゝや。だが、ほんとに俺が何を持つてると思ふ？

ジム。何が何だつて、なんにもならないよ。よしんば、十ポンドの紙幣にしたところ、なんにもならない。

ビル。十ポンドの紙幣よりも最つといゝものだ。ジム、一生懸命考へて、考へ出してくれ。俺たちが金庫を破りに行つたのを覚えてゐないか？ お前何か一つ覚えてゐることはないのか？

ジム。うん、俺も漸くすこし思ひ出しかゝつたぞ。あの時分には夕方といふものがあつたやうだ。それから、すてきな黄ろい光があつた。その光を見ながら、バタアンとしまる戸を開けて内部に這入つて行つたことがある。

ビル。さうだ、さうだ。それはキンブルドンのブリウベヤの店だ。

ジム。さうだ。それでその内部の部屋はまぶしい光でいつばいだつた。ビールがあつた、ビールの中にも光が光つてゐた、賣場にこぼれたビールもあつた。こ

ぼれたやつも光つてゐた。それから其處に黄ろい髪の少女が立つてゐたつて。

あの子も今頃はそこの門の向うつ側にゐるだらう、天の使の中で髪の毛にランプの光を光らせて、もし誰かに何か云はれても、あの時分のとほりの微笑を口許に見せて、綺麗な齒を光らせてゐるだらう。神様のすぐお膝許にゐるだらう、

ジェーンには何も悪むところはなかつたからな。

ビル。うん、ジェーンにはわるいところはなかつた。

ジム。ビル、俺は決して天の使を見たいとは思はない。だが、もし俺が最う一遍ジェーンに會ふことが出来るのなら、俺が泣き度い氣分の時に（笑聲の方を指す）あいつがどんなに笑つたつて、俺は勘辨してやる。お前知つてるか、此處ぢや泣くことが出来ねえんだ。

ビル。ジム、お前さつと最う一遍あの女に會へる。

（ジムは此返事に何の興味も持たないらしく、眼を移して再び今までの仕事を續ける）

ビル。ジム、お前もう一遍あの女に會へる。お前も天國に行きたいと思ふだらう、え？

ジム。(眼も動かさず) 思ふ！

ビル。俺が何を持つてるか、知つてるか？

(ジムは返事しないで、つまらなさうに仕事を續けてゐる)

ビル。ジム、お前あの金庫を覺えてるか？ 例の堅果鉗くわみわりで胡桃を割るやうに金庫をぶち割つたのを覺えてゐるか？

ジム。(仕事を續ける、つまらなさうに) やつばし空虚からだ。

ビル。俺はあの堅果鉗を持つてゐるぞ。ちやうど俺が死んだ時、手に持つてゐたのだ、それを奴等やつらは俺に持たした儘でよこした。俺の犯罪のいゝ證據になると思つたんだらうよ。

ジム。何だつて此處ぢや役にや立たねえ。

ビル。俺は天へ這入り込まふと思ふ。お前も一緒に來ないか、俺に商賣を教へてくれたのはお前だからな。俺はもしだれか外にとり残されてゐると知つたら、天にゐたつて、とてもあの天の使たちのやうに愉快ぢやゐられねえ。俺はあいつらのやうな根性ぢやねえんだ。

(ジムなほも仕事を續ける)

ビル。ジム、ジム、お前あすこへ行くとジエーンに會へるぜ。

ジム。とてもお前にや其門は通れねえ。とても駄目だ。

ビル。あの門は金ぢやないか。金といへば、鉛みたいに軟らかだ。俺の堅果割なら鋼だつてやつつけちまふ。

ジム。駄目だつてことさ。

(ビルは門に向つて岩を置く。その岩にのぼつて錠に届くやうにする、それから錠をいぢり始める。此處で役に立つ道具は鷄卵かきである。ジムはつまらなさうに自分の仕事を續けてゐる。ビルが仕事をたしてゐるさ、岩の破片や金のれぢなぞが床の上に落ちて來る)

ビル。ジム、俺の堅果鉗には何だつてかなはねえ、此奴こいつに會つちや何だつてチー
スみたいだ。

ジム。ビル、お前がそんな真似をやつてるのを奴等は見のがしやしないぞ。

ビル。奴らは俺が何を持つてるか知らねえんだ。俺はまるでチーチースみたいに門を
ひつかいて行く。

ジム。もしか其門が一哩も厚みがあつたら、どうする？ 百萬哩も厚みがあつた
ら、どうする？ もしか十億哩も厚みがあつたら、どうする？

ビル。そんなはずはない。この門の扉は外に開くやうに出来てる。極く厚かつた
ところで四寸ぐらゐなものではけりや、外にはあからない、大僧正様にだつて
あかりやしない。奴らだつて困らあ。

ジム。いつか俺たちが破つたあの大きな倉庫を覚えてるか、中に石炭ばかしつか
這入つてゐなかつた。

ビル。これは倉庫ぢやない、これは天だ。中なかには、むかしの聖人がたが冬の夜よるの
窓みたやうに後光をまぶしくきらつかせてゐなさるんだ。(カタン、カタン、カタン)
燕が旅に出る前に農家の屋根にむらがつてるやうに、うじやうじやと天の使が
ゐるんだ。(カタン、カタン、カタン) それから、眼に見えるかぎり林檎の實つた林
檎畑がある、それからチギリスとユウフラテの河があると、聖書には書いてあ
る。それから寶石でいつぱいになつてる黄金の市まちが、さういふものゝ好きな人
間のためには、あるんださうだ。俺は市まちだの寶石だのには、ちいつと倦きてる
がな。(カタン、カタン、カタン) 俺はまづチギリスとユウフラテの河べりの、林檎
畑のある野原の方へ出て見よう。ひよつとかしたら俺のおふくろがそこいらに
ゐやしねえかと思ふんだ。阿母おふくろは俺のやつてる商賣にあんまり賛成はしてゐな
かつたが。(カタン、カタン) だが好い阿母おふくろだつたよ。天でも好い阿母おふくろが入用ぢ
やあるまいか、天の使たちに親切にしてやつて、あの連中が歌つてる時には坐

つてニコニコしてゐて、機嫌が悪い時は機嫌を取つてやるやうな、もしみんな良い人間があすこにはいれるものなら、阿母も大丈夫あすこにゐる。(不意に)ジム! 奴等は俺のことを阿母のせいにしやしめえな、するだらうか? それぢや不公平な仕打だなあ。

ジム。やつらのやりさうなこつた。まつたく、やりさうなこつた。

ビル。もし天でビールが飲めたり、臍物と葱の料理が食へたり、烟草が吸へたりするものなら、阿母は俺が行つたら、きつとさういふ御馳走をしてくれるだらう。阿母は俺のやりくちをよく知つてゐた、おれの好きな物もよく知つてゐた。何時おれが何處に行くつてこともよく知つてゐた。俺は時刻かまはず窓から這入り込んだが、阿母はいつでもそれが俺だつてことをよく知つてゐた。(カタン、カタン)ジム、阿母は今この門のところにあるのは俺だつてことを知つてゐるだらう。カタン、カタン中は光明の塊りみたいだらう、馴れないうちは俺に阿母が分

からないかも知れない……だが、百萬の天の使の中だつて阿母は分かる。地上に阿母ほどのものはゐなかつた、天にだつて居ないだらう——ジム! やつつけたぞ! もう一とねぢり、それで堅果鉗の仕事はおしまひだ! うごごぞ! 動くぞ! ジム、俺にはちやあんと手答が分かる。

(やがて門の鎖の落ちる音がして、門の扉一すばかりあはつて、岩で止められる)

ビル。あけたぞ、ジム。俺は天の門をあけた! 此處へ来て手を貸してくれ。

ジム。(びつくりして暫時のあひだ口を開けた儘で見えてゐる。それから悲しそうに首を振つて又壘の口をぬき始める)又これも空虚だ。

ビル。(「寂しき地」の前方に横はる真空の中を見下ろして) 星が見える、すてきな星——

(ビルは自分の乗つて立つてゐた岩を退ける。門の扉靜かに動く。ジム飛び上がり驅けて行つて手を貸す、二人で片々づ、扉を持って、顔をその扉に押しつけて後に下がる)

ビル。ふうい、阿母! 其處にゐるかあい? ふうい! ゐるかあい? ビルだ

ようつ、阿母！

(門は重たさうに揺れて開く。中は真空の夜と星である)

ビル。(よろよろとよろけて、眼前に現はれた「無」を眺める。その「無」の中に遠い星が途もなく迷ひ歩いてゐる) 星——。すてきに大きな星だ。ジム。天なんてものではないのだ。

(この眞實暴露の時から殘酷なる激しい笑聲起る。その聲の量は次第に増して、次第に聲高く高くなる)

ジム。奴等のやりさうなことだ。まつたく奴等のやりさうなことだ。ふん、やりさうなことだ！

(幕下りる。笑聲なほつゞく)

アラビヤ人の天幕

アラビヤ人の天幕

(二幕)

人

王

ベルナアブ

駱駝の御者

アオーブ

宰相

ザアバ 名士

エズナルザ

沙漠の浮浪民ウツリイの女

處

● タランナ市の城門の外

時

不明

一一二

第一幕

● タランナ市の城門のそこ。

ベルナアブ。夕方には俺たちは又沙漠の中だな。

アオーブ。さうよ。

ベルナアブ。さうなるとまた幾週間も市まちを見ることは出来ない。

アオーブ。やれ〜！

ベルナアブ。駱駝の踏んで来た路をふり返つて見たら、ちらちらと燈火あかりが見えるだらう、それが市まちの見納めだ。

アオーブ。その時にはもう俺たちは沙漠の中にゐるのか。

ベルナアブ。氣きひづかしい老爺おやいの沙漠の中に。

一一三

アオーブ。沙漠はどうしてあんなにこすく水を隠してゐるのだらう。沙漠は人間に恨があるのかも知れない。沙漠は都會のやうに人間を歓迎してくれない。

ベルナアブ。恨があるんだとも。俺は沙漠は嫌ひだ。

アオーブ。都會ほど美しいものは又とあるまいなあ。

ベルナアブ。都會は美しいものだ。

アオーブ。俺は思ふ、都會がいちばん美しいのは、夜が人家から滑り落ちて行く夜明けの少し後の時だ。都會はゆつくりと夜から離れて行く、ちやうど上着のやうに夜を脱ぎ捨てゝしまふ。そして美しい素肌で立つて何處かの廣い河にその影をうつす。すると日が昇つて来てその額の上に接吻する。その時が都會の一番うつくしい時なのだ。男や女の聲が街に起る、やつと聞えるか聞えないくらゐにかすかに、あとからあとからと起る。それがしまひにはゆつたりと大きな聲になつて、どの聲も一つに集まつてしまふ。さういふ時には都會が俺に物

をいふやうに俺はたび／＼思ふ。都會はあの自分の聲で俺にいふ。アオーブ、アオーブ、お前は何時か一度は死ぬ、わたしは此世のものではない、わたしは昔から何時も在つたものだ、わたしは死なゝいと。

ベルナアブ。都會は夜明けがいちばん美しいと俺には思はれない。沙漠では夜明けが何時でも見られる。俺は思ふ、都會のいちばん美しい時は、日が沈んで夕闇がそうつと狭い町々に降りて来る時分だ。まだ夜でもない、さうかといつて日中でもない夕やみ、ちやうど謎のやうな夕やみ、その夕やみの中では外衣を着た姿を見ることは出来ても誰の姿だか見分けることは出来ない。それからちやうど暗くならうとする時、沙漠に出てゐればたゞ真黒い地平線と、その上に真黒い空とよりほか何ひとつ見る物もない時分、ちやうどその時分、風に揺れる提灯がともされる、燈火が一つ一つ窓に現はれる、そして着物の色がすつかり違つて見えて来る。さうすると何處かの小さい戸口から女が忍び出るかも知れ

ない、男が双物を持つて古い遺恨をはらしに忍んで行くかも知れない。スカア
 ミは店をひるのやうに明るくして一晩中酒を賣らうとする、男たちはあの店の
 外の腰掛に腰かけて小さい青い提灯の暗いあかりで骨牌の遊戯をする、煙のう
 づまく大きな煙管で強い烟草を吸ふ。あゝ、それを見てゐるのは楽しいものだ。
 そして俺は好い氣持になつて考へる。俺が烟草を吸ひながらそんな事を見てゐ
 るあひだに、何處か遠くの方の沙漠では、大きな赤い雲が翼のやうに擴がつて
 ゐるかも知れない、その雲を見ればアラビヤ人はみんな知つてゐる。明日は熱
 風が吹くと、魔の父親のエブサエの呪ひの息の熱風が吹くと。

アオーブ。さうだ、人間も無事に都會に納まつてゐる時に熱風のことを考へるの
 は愉快なものだが、俺は今それを考へたくはない。今日の日のくれる前には俺
 たちはもうメツカに行く途中だらう、むかしから沙漠でどんな事が起るか察し
 たものも豫言したのものもない。沙漠に行くのはちやうど犬に一つ一つ骨を投げ

てやるやうなものだ、犬の口にはいる骨もあらう、落つことす骨もあらう。沙
 漠は俺たちの骨を口に入れてしまふかも知れない、それとも俺たちは沙漠を通
 り過ぎて輝くメツカに行くことが出来るかも知れない。あゝ、あゝ、俺は商人
 になつて賑かな市街の小さな店小屋に一日ぢゆう坐つて金まうけをしてゐたい
 と思ふ。

ベルナアブ。さうだ、市へ絹や裝飾品を買ひに来る何處かの貴族をごまかす方が
 沙漠の中で死をごまかすよりはやさしいことだ。あゝ沙漠！沙漠！俺は美しい
 都會を愛する、沙漠を憎む。

アオーブ。(遠く左手の方を指して) あれはだれだらう？

ベルナアブ。なに？ あの沙漠の入口の駱駝のところにある人か？

アオーブ。さうだ、誰だらう？

ベルナアブ。あの男は遠い沙漠の中の駱駝の行く道を眺めてゐる。人の話には、

王様が沙漠の入口まで出て来て始終沙漠を眺めてゐなさいといふことだ。夕方なんぞ長いあひだあそこに立つてゐてメツカの方を眺めてゐなさいといふことだ。

アオーブ。王様がメツカの方角を眺めてゐたところで何になる？王様がメツカに行くことは出来ない。たゞの一日だつて沙漠に行くことは出来ないんだ。すぐ後へ使が行つて王様の名を呼んで會議室だか裁判所だかに連れ歸る。もしその使に王様が見つけ出せなければ、そいつの首はちよんぎられて吹きつさらしの何處ぞの屋根に高く晒されて、此處からならば物がよく見えるだらうと、判事さんがその首にいふだらう。

ヘルナアブ。さうだ、王様が沙漠に行くことは出来ない。もし神がこの俺を王にしてくれたら、俺はたつた一遍沙漠の入口まで出て行つて、着物からも髭からも砂をふり落して、二度と沙漠は見ないつもりだ。何千の悪魔の親の、ひから

びた慾深ぢい奴！泉を砂でかくし、熱風を吹き立て、何年立たうと、何百年立たうと、俺はもう見返りもしまし、もし神がこの俺を王にしてくれたら、

アオーブ。お前は王様に似てゐるといふはなしだ。

ベルナアブ。さうだ、俺は王様に似てゐる。王様のお父さんが駱駝追ひの姿をして俺たちの村へも来たといふから、そのためだらう。俺は時々ひとり考へる、神は公平だ、もし俺が王様の姿になつて王様を追ひ落して駱駝追ひにしたら、神をよろこばせるかも知れない、神は公平だから。

アオーブ。もしお前がそんなことをやれば、神はいひなさいだらう。ベルナアブを見よ、おれはあの男を駱駝追ひとして生れさせたのに、あの男はそれを忘れてゐる、と。さういつて、神はお前を忘れてしまひなさいかも知れない、ベルナアブ。

ベルナアブ。神が何といひなさいか誰に分からう？

アオーブ。誰に分からう？ 神のなさる事は不思議なものだ。

ベルナアブ、俺だつてそんな事をしやしない、そんな事はしない。たゞ俺が煙草を吸つてゐる時か、よる沙漠の中にある時、一人で考へるのだ、俺は一人で考へてゐる、ベルナアブはタランナの王だと、さういつて俺は云つて見る、宰相よ、スカアミを此處に呼んで酒と提灯と骨牌の臺を持つて來させる、それから町中の者どもを呼んで王宮の前で酒盛をさせ俺の萬歳をどならせると、巡禮たち。(遠くから呼ぶ) ベルナアブ、ベルナアブ！ 畜生のやつ。早く來て駱駝を

ほどけ。もう、メツカの聖地に立つのだ。

アオーブ。駱駝は起ちかけてゐる。旅人の隊はメツカを指して立つて行く、うつくしい市よ。お別れだ。

(ベルナアブ、ベルナアブを呼ぶ巡禮たちの聲遠くなる。)

ベルナアブ。今行くよ、いまましい奴らだ。(ベルナアブアオーブ立ち去る)

(王は王冠をつけた儘で大門から出て來て、石段に腰かける)

王 王冠は王の頭に載すべきものではない。王の笏は王の手に持つべきものではない。王冠は金のくさりで編み、笏は棒杭の如く地に突き刺して、王はそれに足くびを繋がるゝのが本當だ。さうもしたら、王は美しい沙漠にさまよひ泉の側の棕櫚の樹を見ることが出来ないものとあきらめる事が出來よう。あゝタランナよ、タランナよ、わたしは此市を憎む、ほそいほそい市街と、酔ひどれの男たちが惡漢のスカアミちやぢの悪い評判のばくち店でいつの夜も博奕をやつてゐる此市を憎む。あゝわたしは祖先の代から何時の時代にも都會を見たことのない卑しい家の子を妻としたい。我等二人は沙漠の中の長い路を乗り通して、たつた二人でアラビヤ人の天幕までも乗り着けよう。王冠は——何處どの愚かな慾深の人間の苦勞の種にやつてしまへ。しかし、そんな事はどれも出來ないことだ、王はどうしても王である。

(門から宰相が出て来る)

一三三

宰相。陛下！

王。宰相よ、わたしの仕事がまた出来たのか？

宰相。はい、お仕事は澤山にございます。

王。わたしはせめて今夕だけは暇がほしいと思つて居つた。駱駝はメッカの方に首を向けてゐる、せめてわたしは自分が行くことの出来ない沙漠の中に旅人の群の立つて行くのを見送りたいと思つた。

宰相。陛下のあそばさすべきお仕事は澤山にございます。イクトラ國は謀反いたしました。

王。イクトラといふのは何處のことか？

宰相。それは陛下に貢を奉ります小さい國でございます、ゼブダロンより向うの方の山の中の國でございます。

王。そんなことさへなかつたら、わたしは最うすこしでお前に頼んだかも知れぬ、もう少して、わたしも駱駝追ふ群の一人となつて黄金のメッカの聖地に行くことを許してくれと頼んだかも知れぬ。もうこれで五年のあひだわたしも王の仕事をしてゐる、大臣たちの言も聞いてゐる。そのあひだ中沙漠はわたしを呼んでゐた、我が子等の天幕においで、我が子等の天幕においでと、沙漠は云つてゐた、それをその間ぢゆうわたしはこの城壁の中にくらしてゐたのだ。

宰相。もし只今陛下が此市さちをお離れなさいますと――

王。わたしは離れはせぬ、兵を起してイクトラの人民を懲すばかりだ。

宰相。大將たちをお名ざし下さいませ。陛下の軍人族をアグラアバから呼び、竹藪の市のコロナからも呼び、マスクからも呼ばなければなりません。それには陛下がお手づから玉璽をお押しなされましたお書付が必要でございます。御相談役の諸人も評議室でお待ち申し上げて居ります。

一三三

王。もう日も沈みかけた。旅人の群はなぜ立たないのであらう？

宰相。わたくしには分かりませぬ。それでは陛下は――

王。(宰相の腕に手を載せて) 見よ、見よ！ あれはメツカに向けて立つて行く駱駝の影だ。あのうつくしい影は如何にも静かに地を滑つて行くではないか。もう程もなく彼等は沙漠に出て金の砂の上で卒たくなるのであらう。その時日は沈み果て、彼等は夜と一つになるのだ。

宰相。もし陛下が斯様な事にお心を止められまするなれば、駱駝はいくらもございまするが、

王。いや、わたしは駱駝を見たくはない。何時になつても駱駝がわたしを美しい沙漠に連れて行くことは出来ないのだ、永久に都市まちから離れて。わたしは此處に止まつて王の仕事をしなければならぬ。たゞわたしの夢だけは行くことが出来る、駱駝の影がわたしの夢を載せて行つてくれる、アラビヤ人の天幕の側に

平和を見つげに行つてくれる。

宰相。それでは陛下は評議室においで下さいますか？

王。よし、よし、今行く。

(聲遠く聞える、ほおうつ、よおうつ、ほおうつ、おういつ、ほおうつ、よおうつ、ほおうつ、えとつ。)

王。旅人の全隊が今立つて行く。荷を負ふ駱駝の御者の聲が聞える。彼等は始めの十哩は駱駝の後から驅けて行く、そして明日あすは駱駝に乗つてしまふだらう。其時はもうタランナを見返つても見えず、彼等の廻りには沙漠が金の砂の上に降る日のひかりを浴びて横はつてゐるであらう。その時かれらの顔に今までと違ふ色が浮ぶ。わたしは信ずる、夜になれば沙漠が彼等に囁くだらう、平和なれ、わが子等よ、平和なれ、わが子等よ、と。

(此科白のうちに宰相は王の爲に戸を開き、そこにうやくしく身を屈めて待つてゐる、開いた戸の上にしつかりと手をあてながら)

宰相。陛下、評議室にいでなされますか？

王。うん、今行く。このイクトラの事件さへ起らなかつたら、わたしも恐らく旅に出て黄金の沙漠に一年も住むことが出来、メツカの聖地を見ることも出来たらうに。

宰相。イクトラの事件さへございませんでしたならば、陛下もお出かけになれましてたかも知れません。

王。にくいイクトラ！

(門内に行かうとする、王と宰相がちやうど門のところに立つ時、ザアバ右手より入場)

ザアバ。陛下！

王。やれ／＼不幸な王のために又餘計な仕事が出来たか？

ザアバ。イクトラは平らぎましてございます。

王。平らいだと？

ザアバ。それは不意の出来ごとでございます。イクトラの者どもが陛下の兵の小數のものと出會ひましたところ、ふいと流れ矢が敵の大將に當りました、それで謀反人は多勢ではございましたが皆逃げてしまひました。彼等は「陛下萬歳」と三時間もどなつてをりましたさうで。

王。やつぱりわたしは夢に見てゐたアラビヤ人の天幕やメツカの地を見ることが出来ようか。今から黄金の沙漠に出かけて、わたしは――

宰相。陛下――

王。數年の後わたしは再びお前らの許に歸つて来る。

宰相。陛下、それは御無理なことでございます。わたくしどもはとて一年より長くは人民を抑へて居ることが出来ません。人民が申すでございませう、國王はあなくなりなされたのだ、國王は――

王。それでは一年立つたら歸つて来よう。たつた一年で。

宰相。陛下、一年は長い時でございます。

王。今日から一年立つた日の正午にわたしは歸つて来る。

宰相。しかし陛下、タルバの國から王女がおいでなされますお迎へも出るつもりでございますが。

王。カルシツシからやつて来るのかと思つてゐた。

宰相。陛下がタルバの國と御縁組なされます方が御利益と一同考へましたのでございます。國境の山の要害はタルバの王の御手にございます。その上、王はシヤラン國その他諸島とも盛に交易いたされて居ります。

王。どうともお前たちの勝手にするがよい。

宰相。しかし陛下、大使等は此週間に出立のはずで、一ヶ月内には王女も此地においでなされます。

王。今日から一年過ぎた日に来るやうにせい。

宰相。陛下！

王。左様なら、わたしは急いでゐる。沙漠に出る支度もせずばなるまい。(門から

入つて行く、聲だけ聞える) 幸福な人間の母である老年の金の沙漠に――

宰相。(ザアバに云ふ) 天から分別を與へられた人間ならば、お氣の狂ひやすいお年わかの王様にあんな知らせはお聞かせ申さない筈だ。

ザアバ。併しおきかせ申さないわけには行きますまい。直ぐにお聞かせ申さなければ又どんな事が起るまいものでもありません。

宰相。わたしはあの事なら今朝から知つてゐたのだ。もう陛下は沙漠にお出かけになつてしまふ。

ザアバ。とんだ事になりました。併し何とかしてお歸りになるやうにおすすしめ申しませう。

宰相。なかなか直ぐにはお歸りなさるまい。

ザアバ。王様の御機嫌は金に似て居ります。

宰相。澤山の金のやうなものだ。その王の恵をふり撒かうとされるアラビヤ人はどんな奴らか？ 彼奴らの家の壁はツツクで出来てゐる。そこらにゐるさいさいつよ蝸牛でもアラビヤ人の家よりは上等の壁を持つてゐる。

ザアバ。やれ、とんだことになりました。わたくしがあんな事を申上げなければよろしかつたのです。我々は貧乏人になつてしまひませう。

宰相。これから長いあひだ誰も我々に金をくれる人はあるまい。

ザアバ。しかし王様がお留守のあひだはあなたがタランナをお治めなさるのでせう。商人からも百姓からも税を餘計にお取り立てなさるのも御自由でせう。

宰相。あれはたゞ王様に税を納めてゐるのだ、そして王様がタランナにお出でなされば、正義の者に恩恵をお施しになるのだが、お留守になれば、王様のお倉に入るべき物までも、不義の奴ら、神を恐れぬ髭の汚れた奴らの手に入つてし

まふ

ザアバ。まつたく我々は貧乏になることとせう。

宰相。不義の徒から袖の下に少しの金が来るかも知れない。それとも又正しい富豪の何かの裁判を決するため少しの金が来るかも知れない。併し、それ切りだ、神のお助けある陛下のお歸りまでは。

ザアバ。神陛下を守りたまへ。それで、あなたはどうしてもお止めになりますか。

宰相。いや、陛下が供奉の人たちを従へてお出でになつたら、わしはお馬の側について歩いて行く、そして沙漠の中を陛下が御通過になれば、アラビヤ人も御威勢に打たれて心をかたむけて従ひ奉るでございませうと申上げて置かう。それから、そうつと供奉の後方の士官に耳打ちしてその士官から武官長にいはせる。數日うちに駱駝の通路を分からなくしてしまつて、陛下も供奉の人たちも

沙漠の中で迷ひ兒になつて、どうにか斯うにかタランナまで歸つて來られるやうに取り計らはせよう。うまく行くだらうと思ふ。陛下の御一行の來られるまで此處で待つてゐよう。

ザアバ。武官長がそんなことをやつてくれませうか？

宰相。うん、それは貧乏で心の正しいタクバアといふ男だから。

ザアバ。併しそれがもしそのタクバアでなくて、ほかの慾張の人間であつて、タクバアにやるよりも最つと澤山の金を要求したら、どうなさいます。

宰相。それは、欲しいといふだけの物をやるよりほかはない、慾ふかの罪は神が罰したまふであらう。

ザアバ。陛下は此處をお通りになりませうね。

宰相。うん、此處をお通りになる、騎兵をサロイヤ隊からお召しにならなければならぬ。

ザアバ。さうすると、騎兵が來るのは暗くなつてからでせう。

宰相。いや、ひどくお急ぎだつたから、日没前にお通りなされるだらう。すぐに馬を出すやうにおいひ付けになるだらう。

ザアバ。(右手の方を見ながら) サロイヤの方で何の騒ぎも見えませぬが。

宰相。(同じ方を見る) いや、いや、わしにも見えぬ。併し、陛下が大騒ぎをおさせになるに違ひない。

(二人が見てゐるさ、粗末な茶色の上着を額の上までかぶつた人が門から忍び出る。そうつゝ忍んで右手に立ち去る)

宰相。今のは誰だらう。駱駝の方に歩いて行つた。

ザアバ。駱駝追ひの一人に金をやつてゐるやうです。

宰相。そら、駱駝に乗つた。

ザアバ。もしや王様ではなかつたかしら！

(聲遠く左手に聞える。ほおっ、ほおっ！ほおっ、ほおっ！)

一三四

宰相。何處かの駱駝追ひが沙漠に出て行くのだらう。よろこばしさうな聲だ。

ザアバ。熱風があつた男を吸ひ込んでしまふかも知れません。

宰相。どうしよう——もしあれが王様だつたら！

ザアバ。なあに、もしあれが王様だつたら、我々は一年のあひだ貧乏するだけのことです。

(幕)

第二幕

舞臺前に同じ。一年を経過したる後。

王は駱駝追ひの上着をまこひ、沙漠の浮浪民シフンイの女エズナルザと並んで坐してゐる。

王。もうこれでわたしも沙漠を知りアラビヤ人の天幕にも住んで見た。

エズナルザ。沙漠に越した土地はありません。そしてアラビヤ人に越した人間はありません。

王。萬事はもう過ぎてしまつた、わたしは祖先の城に歸る。

エズナルザ。時はそれをどうすることも出来ません。わたくしは自分を育てゝくれた沙漠に歸りませう。

王。あの砂の上に暮らした日にも、天幕の中であけがたにも、わたしの一年の終

りが来て、わたし自身の約束に迫られて自分の城の牢獄に連れ歸られる日が來るといふことを、お前は考へて見たことがあるか？

エズナルザ。時が來ればさうなるといふことは知つてをりました、わたくしの種族は時の力をよく學んでをります。

王。それでは時がわたしどもの無駄の祈りを笑つたのであらうか？ わたくしどもの祈りを笑つた彼は神より大なるものであらうか？

エズナルザ。時を、神よりも大なるものとはいへますまい。しかしわたくしどもはわたくしどもの大事の一年が過ぎないやうにと祈つておました。それを、神もその一年を助けて下さることはお出來なさいませんでした。

王。さう、さう、わたしどもはさう云つて祈つた。人が聞いたら笑ふだらう。

エズナルザ。その祈りは笑はれるやうな祈りではありません。たゞ年を支配する彼ばかりが無情でした。もし殺されようとする人が慈悲を知らない狂暴きまろのサル

タンに生命を助けてくれと祈りましたら、サルタンの奴隷どもは笑ひませう。生命のために祈るのは笑ふべきことではございませんけれど。

王。さうだ、我々は時の奴隷である。明日はタルバの國から王女の來る日だ、我々は運命に従はう。

エズナルザ。時は沙漠に住んでゐるとわたくしの種族たみは申します。あの沙漠の太陽の中にあると。

王。いや、いや、時は沙漠には住んでゐない。沙漠では何物も變らないではないか。エズナルザ。わたくしの種族たみは申します、沙漠は時の故郷であると。時は自分の生れ故郷には仇をしない。併し、世界の何處の國でも、沙漠のほかの國々をば荒すのだとわたくしの種族たみはいつて居ります。

王。なるほど、沙漠は何時も同じである、沙漠の中にある最も小さい石くれまでも同じである。

エズナルザ。時はスフィンクスを愛して彼女には害を加へないと申します。スフィンクスを害するのは忍びないのでございませう。時のためにスフィンクスは澤山の神々を生みました、あの異教徒のをがむ神々を。

王。その神々の父は、その凡てのいつはりの神々よりもずつと恐るべきものなのだ。

エズナルザ。あゝ、時がわたくしどもの小さい一年を助けてくれましたら。

王。時は何物をも惜まず滅ぼしてしまふ。

エズナルザ。時よりも最つと力強い人間の小さな子がございます。その子は世界を時の手から救つてくれます。

王。時よりも力強いその小さい子は何だらう？ 愛だらうか、時よりも力づよいのは？

エズナルザ。いえ、愛ではありません。

王。愛にも打勝つといへば、この世にそれより強いものはない。

エズナルザ。時は弱々しい白髪しらがと皺で愛をも追ひやつてしまひます。かはいさうな小さな愛を、かはいさうな愛を、時は追ひ拂つてしまひます。

王。時にも打勝ち愛よりもなほ勇ましいその人の子は何ものだらう？

エズナルザ。それは追憶おもひででございます。

王。さうだ。風が沙漠から吹いて来て蝗蟲いせむしが我が無情の城壁に吹きあてられる時、わたしは追憶おもひでを呼ばう。沙漠も見えず沙漠の風の音も聞えない時、わたしは追憶おもひでを呼ばう。

エズナルザ。追憶おもひでは時も滅ぼすことの出来ない私どもの一年をまた持ち歸つて来てくれませう。追憶おもひでが否といへば、時もその一年を殺すことは出来ません。その年はもう流されものとなりましても處刑は猶豫うごちされます。すこし遠く離れたところから、わたくしどもは幾度でもその一年を見ることが出来ませう。その

一年の凡ての時も凡ての日も一つ一つにわたくしどもの許に来ては踊つて行き、又来ては踊つて行つてくれます。

王。まつたくそれは眞理だ。彼等は我々の許に歸つて来てくれる。天地の間に、奇蹟を行ふものと雖も、此一事は出来ないことゝわたしは思つてゐた。時の手に落ちて行つた過去の日を取り返すことは出来ないゝわたしは思つてゐた。

エズナルザ。それは追憶のする遊戯でございます。追憶は市でも沙漠でも僅かな入さへゐるところなら、そうつと忍んでまゐります。そして蛇に歌を唄つて聞かせる不思議な怪しい魔術師のやうに、人前にその遊戯をして見せます。幾度でも幾度でも、くり返しくり返し。

王。我々は幾度も幾度も追憶にひかしの日を持つて歸つて来て貰はう。お前が以前の種族の中に歸り、わたしがタルバから来る王女と無理に結婚させられた後

エズナルザ。追憶は美しい金の沙漠から足に砂をつけてまゐりませう。追憶の一人一人があたまの上にもう過ぎた日の夕陽の光を載せてまゐりませう。追憶の唇は過去の夕がたの聲で笑ふでせう。

王。もう殆ど午になつた、殆ど午になつた。ほとんど午だ。エズナルザ。それでは、もうお別れいたしませう。

王。あゝ、どうぞ市に来て彼處の女王となつてくれ。わたしは王女をタルバに返す。お前がタランナの女王となつてくれ。エズナルザ。わたくしはもうわたくしの種族の中に歸ります。あなたはタルバの王女と明日にも結婚なさいまし。あなたはさうお約束なさいました。わたくしもさう約束いたしました。

王。あゝ、歸らうとわたしが約束さへしなかつたら。

エズナルザ。王のお言葉は王の冠や王の笏や王の御位と同じやうなものでござい

ます。都會と同じやうに、ほんたうはつまらないものなのでございます。

王。わたしは自分の言葉を取り返すことは出来ぬ。併しお前はタランナの女王になれる。

エズナルザ。タランナは浮浪民を女王にはいたしません。

王。タランナが浮浪民を女王にするやうに、わたしがさせる。

エズナルザ。あなたは浮浪民を一年と都會の中に落ちつかせることは出来ません。

王。わたしは都會に落ちついた浮浪民を知つてゐる。

エズナルザ。わたくしはそんな浮浪民ではありません——あなたも、アラビヤ人の天幕にお歸りなさいまし。

王。わたしには歸れぬ。わたしはもう約束した。

エズナルザ。約束を破つた王もでございます。

王。わたしはそんな王ではない。

エズナルザ。それでは、追憶といふ名の小さな人間の子ばかりがわたくしどものものでございます。

王。よし、二人が別れる前に、追憶は消えた日の中のどの日かを再び返してくれらう。

エズナルザ。始めての日がよろしうございませう。駱駝がエルローリスに着いて、わたくしどもが泉の側で逢つた日がよろしうございませう。

王。我々の一年は數日不足になつてゐる。わたしの一年は此處で始まつたのだから。もう其時は駱駝が沙漠に出てから數日の後であつた。

エズナルザ。あなたは旅人の群から少し離れて、夕日の面に駱駝を進めていらつしやいました。あなたの駱駝はゆつたりゆつたり動いてまゐりました。それでもあなたは疲れていらつしやいました。

王。お前は泉に水をくみに来た。はじめ、わたしはお前の眼を見ることが出来た。そのうち星が出てあたりが暗くなつて、お前の姿だけが見えた。お前の髪の上だけにだけすこしの光が残つて、星のひかりが映つたのかどうかは知らぬが、お前の髪が光つてゐた。

エズナルザ。さうすると、あなたがわたくしに駱駝のことで何かあつしやいました。

王。その時わたしはお前の聲を聞いた。お前は今いふやうなことは其時は云はなかつた。

エズナルザ。それは申しはいたしませんでした。

王。お前は今のやうな口のきゝかたもしなかつた。

エズナルザ。あの時が躍つて歸つてゐります。

王。いやいや、あの時の影ばかりが歸つて来るのだ。それから二人は一緒にメツカ

の聖地に行つた。二人は二人ぎりて金の沙漠に住んで見た。生れた儘の自由な陽が自由の歌を唄ふのを聞いた、美しい夜の風も聞いた。あの一年はもう何ものこらぬ、むなしい影ばかりだ。追憶はその影を鞭打つ、しかし、影は踊つてくれぬ。(エズナルザ返事をしない)

王。我々は沙漠の中で別れをした。我々の別れの聲を市には聞かせまい。

(エズナルザ顔を蔽ふ。王は靜かに立ち上がり石段を上がる。その時左手から宰相及びザアバ入り来る二人はほかの人たちがゐるのに気がつかない。)

宰相。きつとお歸りなさる。きつとお歸りなさる。

ザアバ。もう午です。わたくしどもは瘠せてしまひました。敵はわたくしどもを笑つてゐます。もし王様がお歸りにならなければ、神がお忘れになつたので、親切な世間がわたくしどもをかはいさうがることとせう。

宰相。もし生きておいでになれば、きつと歸つておいでになる。

(メルナアブとアオーブ入場)

ザアブ。午も過ぎたらしうございます。

宰相。それでは、おなくなりなされたのか、盗賊どもに捕へられでもなすつたか。

(宰相とザアブ頭に塵を載せる)

メルナアブ。(アオーブに向つて) 神は公平だ！ (宰相とザアブにいふ) わしが王だ！

(この時ちやうど王は門の戸に手をかけたが、メルナアブが今の科白をいふと同時に、王は再び石段を下りてソフシイの傍に坐する。彼女は両手で支へてゐた顔を上げてちいつと王を見詰める。王はアラビヤ風に顔を半分隠してメルナアブと宰相ザアブ等を見てゐる)

宰相。まつたくあなたは王様でいらつしやいますか？

メルナアブ。わしが王だ。

宰相。あなたは此一年のあひだにひどくお變りなさいました。

メルナアブ。人間も沙漠に出れば變るものだ。随分と變るものだ。

アオーブ。閣下、まつたく此お方が王様でございます。王様がおしのびで沙漠においでなさいました時、このわたくしが駱駝のお世話をいたしました。まつたく此お方が王様でございます。

ザアブ。陛下でいらせられる。陛下におめにかゝれば、直ぐ分かります。

宰相。君は極くたまさかにしか陛下におめにかゝらなかつたらう。

ザアブ。たびくおめにかゝりました。

メルナアブ。左様、わしどもはたびく會つた、大分たびたび會つた。

宰相。あなたと御一緒に來られた此人のほかには、誰かひとり、あなたをしかとお見分けする人がありませんれば、我々一同も安心いたしませうが。

メルナアブ。その必要はない。わしが王であるから。

(この時王は立ち上がり片手をのぼす、手掌を下にむけて)

王。聖なるメツカの地で、城門が多く屋根の青いメツカの地で、我々はこの人を

王と知つて居ました。

ベルナアブ。うん、それはほんとうだ。わしも此人をメツカで見ることがある。宰相。(首を低く下げて禮しながら)おゆるし下さいませ、陛下。沙漠は君の御姿を變へました。

ザアバ。わたくしには陛下だといふことがちやあんと分かつて居りました。アオーブ。わしだつてもさうだ。

ベルナアブ。(王を指して)あの者に相當の褒美をやれ。宮中で位置を興へてやれ。宰相。かしこまりました。

王。わたくしは駱駝追ひでございますから、今から自分の駱駝のところに歸ります。

宰相。お前の望どほりにするがい。

(ベルナアブ、アオーブ、宰相とザアバ、月口より退場する)

エズナルザ。あなたはほんとうに賢いことをなさいました。智慧のむくい幸福です。

王。彼等にはもう王が出来た。我々はまたアラビヤ人の天幕に歸らう。

エズナルザ。あの人たちは馬鹿でございませう。

王。だから馬鹿な王を見つけ出したのだ。

エズナルザ。自分から好き好んで城壁の中に住まはうとする人は馬鹿ものでございませう。

王。王と生れついたものもある。然るにあの男は自ら好んで王となつた。

エズナルザ。さあ、あんな人たちを捨て、まゐりませう。

王。もう一度もとへ歸らう。

エズナルザ。わたくしの種族たかの天幕にお歸りなさいまし。

王。ほかの人たちから少し離れたところで、可愛いらしい茶色の自分の天幕の

なかに住まう。

エズナルザ。砂があけがたの風に小聲で囁くのを又きくことも出来ませう。

王。あけがたになると、遊牧民たびびとが天幕の中で立ち騒ぐのを聞くことも出来よう。

エズナルザ。豺がわたくしどもの側を歩いて自分の山に歸つて行く足音も聞えませう。

王。夕方、陽が沈む時にも、我々はもう過ぎた日のために歎くには及ばない。

エズナルザ。夜よるになつて頭あたまを空に向ければ、まだ人の手に買はれたことのない古いふるいお星様がわたくしの髪の中で光りませう。わたくしどもは王冠を飾つた世界の女王たちを羨むにも及びません。(幕)

神々の笑ひ

神々の笑ひ

(三幕)

人

カアノス王

豫言者

イクタリオン

ルデプラス

ハアバガス

第一の衛兵

第二の衛兵

駱駝隊の一人

首切役

王妃

サアミヤ イクタリオンの妻

アロリンド ルテアラスの妻

カロリツクス ハアバガスの妻

従者等

處

カアノス王の時代の竹藪の市テツク

時

バピロンの衰へはじめた頃

第一幕

カアノス王の代。 藪の市^{まち}テツク。

サアミヤ。御存じの通り、私の血統と云へば、殆ど神様の子孫なのですから。

アロリンド。うちの父の劍といつたら、それは恐ろしい劍で、父はそれを外套で隠してゐたさうですわ。

サアミヤ。鞘に寶石がついてゐないので、隠していらしたのでせう。

アロリンド。鞘には海よりも青いエメラルドが澤山ついてをりましたわ。

サアミヤ。さあ、わたくし、ちよつと此處でお別れして、そこいらの店まで行つてまゐりませう、テツクへ来てからまだ一度も髪をとり替へませんのよ。

イクタリオン。バアバル・エル・シャアナツクから髪を持つて来なかつたのか？
サアミヤ。持つて来る必要なかありませんもの。必要品を買ふことの出来ない
やうな處へ王様が朝廷をお移しになる筈はありませんから。

アロリンド。あなたのお供をさせて頂きたうございますわ。
サアミヤ。どうぞ、お供させていたゞきます。

アロリンド。(ヘルデブラスに) あたくし、此テツクの市のほかの御殿が見物いたした
うございますから。(サアミヤに) それでは城壁おしろの外まで行つて、この近邊にどん
な貴族たちが住んでゐるか見てまゐりませう。
サアミヤ。それは面白うございませう。

(サアミヤとアロリンド出て行く)

イクタリオン。ふん、たうとう我々はテツクに来てしまつた。
ルデブラス。陛下がテツクへおいでになつたのは僥倖しやほせだつた。とてもおいでには

なるまいと思つてゐた。

イクタリオン。非常に美しい市まちだね。

ルデブラス。陛下が何年となくあの恐ろしいバアバル・エル・シャアナツクにお住
居の時、僕はもうとても風の吹き通す美しい田舎に日の出を見ることは出来な
いかと思つてゐた。我々は一生をバアバル・エル・シャアナツクにくらして、死
んだら家と家の中に葬られることかと思つた。

イクタリオン。あの市まちは家が山のやうに高く聳えて、そして一つの花もなかつ
た。風がどうしてあの市に吹いて来たか不思議なくらゐだ。

ルデブラス。うん、君は知つてるか、陛下を此處までお連れ申したのは此僕なの
だ。僕は遠い國から来る蘭の花を毎日毎日陛下にさしあげた。たうとう陛下も
お氣が付かれて、よい花だなと仰せられた、テツクから来る花でございますと
僕が申上げた。テツクの市まちは蘭の花でまるで紫いろして居ります、駱駝に乗つ

た人たちが遠い沙漠の上で見ると、テツクの市は紫に見えるさうでございますと申上げた、すると――

イクタリオン。なあに、陛下を此處へお連れ申したのは君ぢやない。ある時、陛下はバアバル・エル・シャアナツクで一羽の蝶を御覧になつた。七年といふもの一羽の蝶もあの市には來なかつたのだ。その一羽が生きてゐたのは我々の好運さ、僕は幾たびとなく何百羽も取り寄せたのが、バアバル・エル・シャアナツクへ來ると皆死んでしまふ、それでその一羽だけ生き残つてゐた、その一羽の蝶を陛下が御覧になつた。

ルデプラス。そこで陛下が僕の蘭の花にお氣がつかれたのか？

イクタリオン。陛下がその蝶を御覧になつた時、ふつとお心が轉換されたと見える。それからまるで變つた方になられた。さうでもなければ、花なんぞにお氣がつかれる筈はない。

ルデプラス。陛下はテツクへ蘭の花を見にいらしたのだ。

イクタリオン。まあ、いゝよ、いゝよ。我々は此處へ來てしまつた。ほかの事は何でもいゝぢやないか。

ルデプラス。さうだ、我々は此處へ來た。蘭の花は實にうつくしい。

イクタリオン。朝の空気は何といふ美しいものだらう。僕は非常に早く起きて窓から空気を吸つた、それは、身體の爲ではないのだ、たゞそれがテツクの美しい野の空気だから吸ふのだ。

ルデプラス。うん、朝起きるといふ事は驚嘆すべきことだね。何もかも野から新しく來たやうな氣持がする。

イクタリオン。我々がバアバル・エル・シャアナツクから乗り出すのに三日かゝつた。みんなが吃驚して我々の駱駝を見てゐたのを覚えてゐるかい？ 何年となく一人の人間もあの市から出て行つたものはなかつたのだから。

ルデブラス。あゝいふ大きな市まちから離れることはむづかしいことさ。市まちは我々の周囲を次第に密に取り囲んで来る。そして我々は野を忘れてしまふ。

イクタリオン。(遠く眺めて) 眼の下に見えるあの藪はちやうど海のやうだ。その中に輝いてゐる蘭の花は、紫に光る不思議な魚を載せたツロの國の船のやうだ。ツロの船は帆までもその魚の紫に染めてゐた。

ルデブラス。蘭の花は動かないから船とは見えない。蘭の花が似てゐるのは——
——蘭の花はこの世界の人間の手に觸れる何物にも似てゐない。蘭の花は眼に見えない唄ひ手の唄ふ微かな美しい歌のやうでもある。蘭の花は人の知らない罪に誘ふ誘惑のやうでもある。蘭の花はその繁みの下の暗がりくらがりを滑り歩く虎を思ひ出させる。

(ハアバガス及び宮中の貴族の一人槍と皮帯を持って入り来る。)

イクタリオン。やあ、何處へ？

ハアバガス。獵に行かうかと思つて。

イクタリオン。獵に！ おもしろいなあ！

ハアバガス。御所の門のところから下りて行く細い路がある、その路を行くと突き當りがあの藪になつてゐる。

ルデブラス。テックはまるで天國みたいだ。

イクタリオン。君は今まで獵に行つたことがあるかい？

ハアバガス。いや、僕はたゞ夢に見てゐただけだ。バアバル・エル・シヤナックでは其夢も殆ど忘れかけた。

イクタリオン。人間は市まちに住むために造られたのではないんだな、僕は今までこの理屈を知らないでゐた。

ルデブラス。一緒に行かう。

イクタリオン。僕も一緒に行く。この細い路を下りて行くと、彼處が藪か。僕も

槍を持つて来る。

一六〇

ルデプラス。あの藪にはどんなものがゐるだらう？

ハアバガス。不思議な獣がゐるさうだ、虎もゐるとかいふ話だ。

貴族。我々はもう二度とバアバル・エル・シヤナツクに歸りたくないものですな。イクタリオン。大丈夫。安心したまへ。

ルデプラス。我々は陛下をテツクにお止め申す。

（一同出て行く、二人の衛兵等居残つて玉座の側に立つてゐる）

第一衛兵。みんなテツクに來たのを嬉しがつてゐる。俺もやつぱし、うれしい。

第二衛兵。ひどく小さい市だね。こんな市を二百やそこら合せたところでバアバル・エル・シヤナツクは出來上がらない。

第一衛兵。それはさうだ。併し、此處の方が美しい市だ、バアバル・エル・シヤナツクは世界の中心だ、人間がみんな彼處あそこに寄り集まつて來た。

第二衛兵。俺はバアバル・エル・シヤナツクのほかにこんな王城しやうじやうがあらうとは思はなかつた。

第一衛兵。御先祖様の時代に造られたものさ。その時代には王城しやうじやうばかり造つてゐたのだ。

第二衛兵。もう今頃はみんな藪の中に這入つたらう、直ぐ其處だもの。獵に行くをみんなが悦んでゐたつけ。

第一衛兵。うん、悦んでた。バアバル・エル・シヤナツクでは虎退治は出來ないからな。

（サアミヤとアロリンド泣きながら入り来る）

サアミヤ。あゝ、どうしよう。

アロリンド。あゝ、あゝ、あゝ！

第一衛兵。（第二衛兵に）どうかしたのだ。

(カロリツクス登場)

一六二

カロリツクス。皆様がた、どうあそばして？ (衛兵等に) あちらへ、あちらへ行つとくれ。(衛兵等去る) どうなさいましたの？

サアミヤ。あの、わたくしたちは細い路を下りてまわりましたの。

カロリツクス。はあ、それで？

アロリンド。それが市の大通りなのでございますよ。

(二人静かに泣く)

カロリツクス。へえ！ それで？ それで？

サアミヤ。その往來のおしまひが籤なんですの。

カロリツクス。籤へいらつしやいましたの！ 虎がをりはいたしませんでしたか？

サアミヤ。いゝえ。

アロリンド。いゝえ。

カロリツクス。それからどうなさいました？

サアミヤ。それから歸つてまわりましたの。

カロリツクス。(心配さうな聲で) 往來で何か御覽になりましたの？

サアミヤ。なんにも見ませんでした。

アロリンド。なんにも。

カロリツクス。なんにも？

サアミヤ。店が一つもありませんもの。

アロリンド。新しい髪の毛を買ふことも出来ませんわ。

サアミヤ。わたくしたちは髪の毛へつける金砂を(泣く)買ふことも出来ません。

アロリンド。近所に(泣く)交際するやうな男の方も一人もいらつしやらないんです。

(カロリツクス口惜しそうに泣き出して何時までも泣いてゐる)

一六三

サアミヤ。バアバル・エル・シヤナツク！バアバル・エル・シヤナツク！あゝ、なぜ王様はバアバル・エル・シヤナツクをお離れになつたのでせう？

アロリンド。バアバル・エル・シヤナツク！彼處の市街はみんな瑪瑙で出来てゐました。

サアミヤ。あすこには美しい髪の毛を賣つてる店がありました。

カロリツクス。王様に直ぐにお歸りになつて頂きませう。

サアミヤ。(少し落付いて) 王様に明日お歸りになつて頂きませう。私の良人から王様にお話させませう。

アロリンド。ひよつと私の良人の方が有力かも知れません。

サアミヤとアロリンド。私の良人が陛下を此處へおつれ申上げたのです。

サアミヤ。なんでございますつて？

アロリンド。なんでもございませせん。何とおつしやいましたの？

サアミヤ。何でもございませせん。あなたが何かおつしやつたと思ひましたの。

カロリツクス。これは私の良人から王様にお話させた方がよろしいかも知れませ

ん。あの人はテツクに来ることを始めから反対でございましたから。

サアミヤ。(アロリンドに) あの方は陛下に對して力はないのでせう、陛下はとにかくテツクに入らしつたのですから。

アロリンド。さうね、私どもの良人たちで此始末をした方がよろしいでせう。

カロリツクス。わたくし自身も王妃様の方には少しは力もございます。

サアミヤ。それは駄目でございますわ。王妃様はすつかり神経衰弱でいらつしやいますから、何か申上げればお泣きになりますし、なにか御相談申上げると、大聲でお泣きになつて、侍女たちがお側に來てお扇ぎ申したり嗅ぎ香水をお上げ申したりしなければなりませんもの。

アロリンド。御自分様のお部屋からお出になることはなし、王様は何もおきんに

もなりましたまいし。

一六六

サアミヤ。お聞きあそばせ、皆様お歸りのやうでございます。獵の唄をうたつて
おいでです——まあ、獸けものを殺したのでせう、二本の枝に載せて四人がしりでか
ついで來ますわ。

アロリンド。(つまらなまうに) どんなけだものでせう?

サアミヤ。私にも分かりませんわ。曲がつた角があるやうに見えます。
カロリツクス。みんなで行つてお目にかゝりませう。

(唄の聲悦ばしきうに大聲に聞える)

(貴婦人たち衛兵の出て行つた方から出て行く)

(衛兵入り来る)

第一衛兵。何がどうしたのだから、また御機嫌が直つて笑つてゐる。

第二衛兵。自分たちの旦那が迷ひ見になつたと思つて心配してゐたところへ今無

事に歸つて來たからさ。

第一衛兵。お前に分かるものか、お前には女は分からない。

第二衛兵。お前に分かるぐらゐ俺にだつて分かる。

第一衛兵。だから俺が云ふとほりさ。お前には女は分からない。俺には女が分か
らないんだ。

第二衛兵。——ふうん！(問)

第一衛兵。もう俺たちはテックに落ちつくことになるのだらう。

第二衛兵。なぜ落つくことになるんだ?

第一衛兵。あんなに嬉しきうに獵の唄をうたつてるのが聞えなかつたか? 獵犬
は獲物の足跡から外れるものではないさうだ、あの連中もこれから獵はかしや
り續けるんだらう。

第二衛兵。併し王様は此處にお落付になつておいでだらうか?

一六七

第一衛兵。陛下はイクターオンやルデプラスがお勧め申す通りなさるのだ。陛下は王妃のお言葉をおききにならないといふことだ。

第二衛兵。王妃はお氣が變なのだ。

第一衛兵。お氣が變ではないのだが、奇妙な御病氣なのだ。何も恐ろしい事が無いのに、始終何か恐れていらつしやるさうだ。

第二衛兵。それは恐ろしい病氣だ、それぢや、上から天井が墮ちかゝるか、地面が足の下で切れ切りに裂けるか、怖がるやうになるだらう。そんな事を怖がるくらゐなら、俺は氣違ひになつた方がいゝ。

第一衛兵。(真すぐに前方を見る) しいつ!

(王及び供奉の人々入場。王は玉座に坐し、向う側よりイクターオン、ルデプラス、ハアバガス等その妻と手を携へて入り来る。三組の夫妻王の前に禮をする。それから手をつないだ儘で腰掛ける。王は各夫妻にいち／＼うなづいて見せる)

王。(サアミヤに) 奥さんは、テツクに來たことを悦んでをられるだらう?

サアミヤ。悦んで居ります。

王。(アロリンドに) パアバル・エル・シャナツクよりも、此處の方が愉快でせう?

アロリンド。はい、ずつと愉快でございます。

王。(カロリツクスに) 欲しいものは何でもテツクにありますか?

カロリツクス。何でもございます。

王。(ハアバガスに) それでは長いこと此處に落付けるな?

ハアバガス。國務の御都合上、それは危険でございます。

王。國務の都合? なぜ此處にゐては悪いのか?

ハアバガス。陛下、世界に一つの諺がございます、パアバル・エル・シャナツク市

に於て第一の人物が全世界に於て第一の人であるといふ諺でございます。

王。わたしはそんな諺はきいたことがなかつた。

ハアバガス。陛下、つまりぬ謠は王者の尊いお耳には聞えませぬ、併しそれはより低い人々の耳には、親より子へと、いつの時代にも聞えてをります。

王。古びた謠のためにわたしはバアバル・エル・シヤナツクに歸らうとは思はぬ。ハアバガス。陛下、危険な事が――

王。(貴婦人たちに)奥さん方のお耳にはつまりぬ國家の事務を相談します。

サアミヤ。(立ち上がり)陛下、さういふお話は、伺ひましても私どもには分からぬことでございますから、御免あそばせ。(夫人たち出て行く)

王。(イクタリオンミルデブラスに)國家の事務も少しのあひだ休まうではないか? この古い美しい地で幸福に暮らして見たいと思ふが。

ルデブラス。陛下のお思召なれば、我々は従はなければなりません。

王。しかし、テツクは美しい地とは思はぬか? 籐の蘭の花は驚嘆すべき壯觀ではないか?

ルデブラス。驚嘆すべきものと思はれてゐたのでございます。バアバル・エル・シヤナツクでは蘭の花が珍らしいので綺麗に見えたのでございます。

王。しかし、花の上に朝日が映る時、まだ朝露がある時、うつくしいとは思はぬか? 蘭は實にうつくしい。

ルデブラス。蘭の花が淺黄でございましたら、美しいだらうと存じます、そしてもすこし花がすくなかつたら、よろしうございませう。

王。わたしはさうは思はぬ。イクタリオン、お前は此市を美しいと思ふか? イクタリオン。陛下、仰の通りでございます。

王。おゝ、お前が此市を愛すると思へば、わたしは悦ばしい。わたしは此市を崇拜してゐる。

イクタリオン。陛下、わたくしは此市を愛しては居りません、私は非常に憎んでをります。たゞ陛下が美しいと仰せられましたから、此市が美しいといふこと

は存じてをります。

ルデブラス。陛下、この市は恐ろしい不健康地でございます。
ハアバガス。バアバル・エル・シヤナツクをお留守にあそばすのは危険でございます。

イクタリオン。どうぞ世界の中心へお歸りになりますやう陛下に御願ひいたします。

王。わたしはバアバル・エル・シヤナツクには二度と歸らぬ。

(王は従者を連れて退場。イクタリオンミルテアラス、ハアバガス居のこゝる)

(アロリンドとカロリツクス入場。二人とも自分たちの良人の側に情愛深さうに行く)

アロリンド。陛下にお話なさいまして?

ルデブラス。うん

アロリンド。すぐにバアバル・エル・シヤナツクにお歸りあそばすやうにお申上げ

になりまして?

ルデブラス。うん、それは――

アロリンド。何時御出立になりますの?

ルデブラス。御出立になるとはおつしやらなかつた。

アロリンド。何でございますつて?

カロリツクス。わたくしたち歸るのではありませんの?

(アロリンドとカロリツクス泣いて良人たちから離れる)

ルデブラス。しかし我々は陛下に申上げたのだ。

アロリンド。あゝ、わたくしたちは何時までも此處にゐて此處で死ぬんでせう。

ルデブラス。しかし我々は出来るだけの事はやつて見たのだ。

アロリンド。あゝ、私はテツクに埋められるのだ。

ルデブラス。もう此上どうにも出来ないんだ。

アロリンド。私の着物はやぶけて髪の毛も古くなつてしまひました。私はぼろを着てゐるんです。

ルデブラス。お前は美しい服装をしてゐるとわたしは思ふが

アロリンド。美しい服装をしてゐますつて！ もちろん、私は美しい服装をしてゐますわ！ しかし誰が私を見てくれますか？ 私は藪の中に一人ぼつちで、此處で死んで埋められるんでせう。

ルデブラス。しかし――

アロリンド。あゝ、構はないで下さい。あなたには何も尊いものはないんですか？ 私の悲しみも尊くはありませんか？

(アロリンドとカロリックス退場)

ハアバガス。(ルデブラスに) どうしたもんだらう？

ルデブラス。女はみんな同じこつた

イクタリオン。僕は自分の妻にあんな口はきかせない。

(ハアバガスとルデブラス退場)

イクタリオン。サアミヤは泣きはしまい。女の泣くのを見てゐるのはまつたくやり切れない。(サアミヤ入場) どうぞふさがなくてくれ、ふさがなくてくれ。俺は陛下にバアバル・エル・シャナツクへお歸りになるやうにおすゝめしたが駄目だつた。お前もすこし此處で馴れれば愉快になれる。

サアミヤ。(大聲に笑ひ出す) あなたが陛下の御相談相手ですつて！ おほ、ほほ！ あなたが式部官長ですつて！ 金のお杖をお預りしてゐるんですつて！ おほ、ほ、ほ！ まあ陛下の犬にビスケットでもやつていらつしやいました。

イクタリオン。何だと！

サアミヤ。陛下の犬に小さいジンジャ・ビスケットでも投げておやんなさい。犬